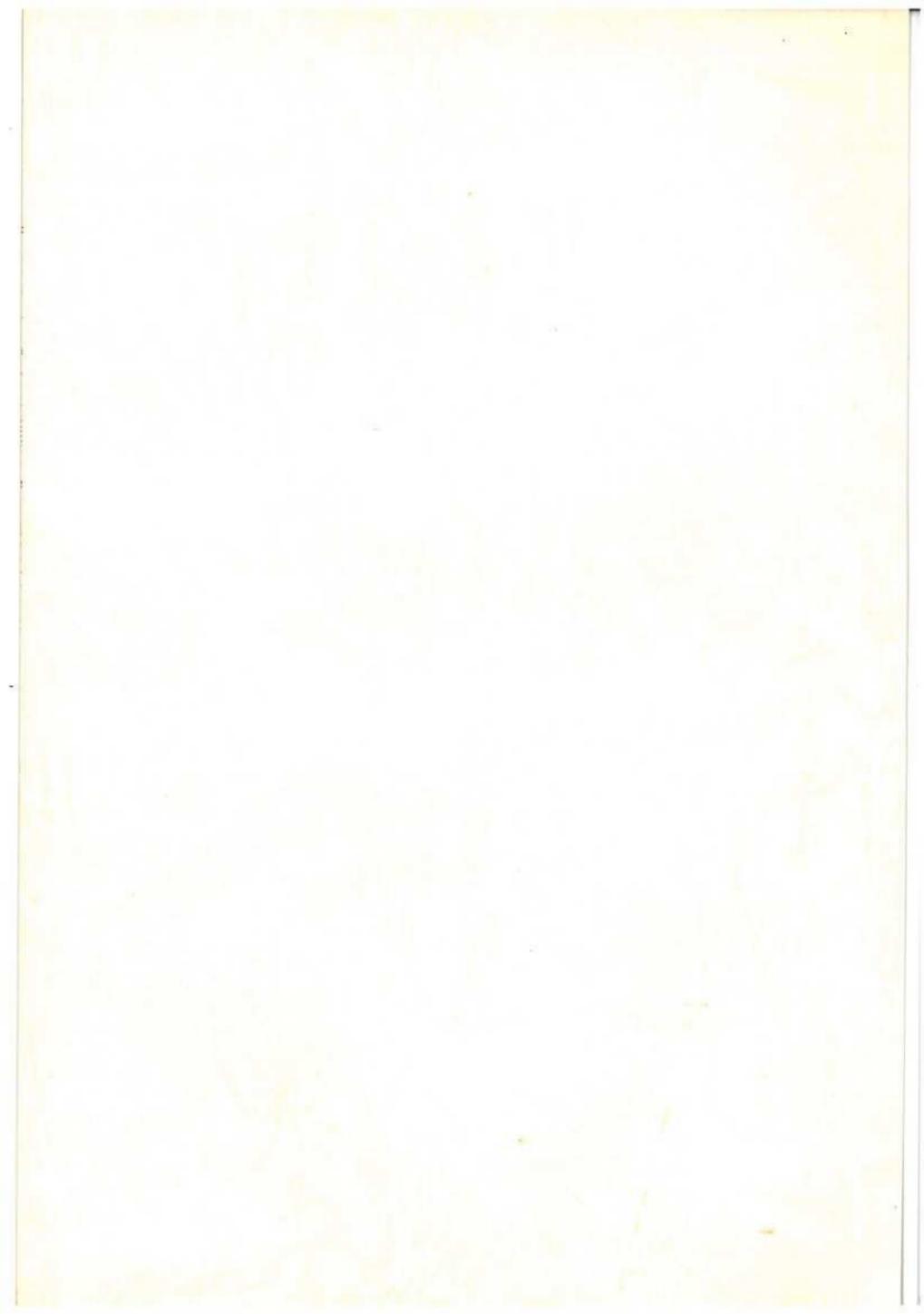


原遺跡・原横穴群・次郎丸古墳群

掛川市上屋敷・西郷土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

掛川市教育委員会



原遺跡・原横穴群・次郎丸古墳群

掛川市上屋敷・西郷地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

掛川市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成6年6月2日から平成7年12月4日まで現地調査を実施した、静岡県掛川市上西郷738外に所在する原遺跡及び原横穴群、次郎丸古墳群1号墳の発掘調査報告書である。
2. 調査業務は、掛川市上屋敷・西郷土地区画整理組合の委託を受け、掛川市教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、社会教育課学芸員（当時）戸塚和美が担当し、報告書作成は文化課職員で行った。挿図の作成について、縄文時代遺物は松本一男、方形周溝墓・弥生土器・横穴は井村広巳、中世期遺構図・土師器は村松弘規、その他は大熊茂広が担当した。弥生土器の一部は、萩野谷正宏（当時静岡大学学生）が実測した。執筆も分担し、目次に執筆者の名を記した。本書の編集は大熊が行った。
4. 発掘作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得た。

青島信二　木村治郎　長谷川勇次郎　横山正氏　山崎辰雄　大石トモ　石龜まつ　山崎　国
松浦てつ子　堀内ひろ　馬場とよ子　弓桁きよ　鈴木秀子　袴田きよ　鈴木静江　早瀬よし子
鈴木ひで　山本みちる　井野鈴江　鈴木てる　梅津まさる　中山あさ　鈴木辰江　松浦富美江
松浦まさ子　棟葉たみ江　中村すま子　松浦せい子　長谷川幸子　棟葉豊子　藪内光恵
児玉昌子　清光真由美　高橋直美　山下広美　青木嘉代子　五十嵐つね子　竹村和紀
5. 現地調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の機関、方々にご教示をいただいた。ここに記して、深く感謝申しあげたい。

加藤和男、川江秀孝、佐藤由紀男、白沢　崇、鈴木敏則、永島正春、磐田市教育委員会
なお、出土した鉄製品は、掛川市立病院でX線撮影を行った。7号墓出土鞍は、国立歴史民俗博物館情報資料研究部で分析を行った。
6. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 挿図における方位は、座標北を示す。
2. 本書で使用した遺構名称は以下の通りとした。

S B : 竪穴住居跡　　S D : 溝状遺構　　S E : 井戸及び溜状遺構　　S F : 土壙
S H : 堀立柱建物跡　　S P : 柱穴及び小穴　　S X : 性格不明の遺構　　S Z : 方形周溝墓
3. 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目 次

例 言

凡 例

I 発掘調査と遺跡の概要 (大熊)	1
1. 調査に至る経過と調査の目的	1
2. 調査の方法と経過	1
3. 遺跡をめぐる環境	1
II 調査の内容	3
1. 縄文時代 (松本)	3
1) 土 器	3
2) 土 製 品	5
3) 石 器	5
4) そ の 他	6
2. 弥生時代	6
1) 方形周溝墓 (井村)	6
2) 土 器 棺 (井村)	10
3) 堆 穴 住 居 跡 (大熊)	11
4) 捜立柱建物跡 (大熊)	12
5) 溝 状 遺 構 (井村)	13
3. 古墳時代	13
1) 次郎丸古墳群1号墳 (大熊)	13
2) 溝 状 遺 構 (大熊)	13
3) 堆 穴 住 居 跡 (大熊)	14
4) 原 横 穴 群 (井村)	16
4. 奈良時代・平安時代 (大熊)	22
1) 土 墓	22
2) 緑 軸 陶 器	22
5. 中世	22
1) 捜立柱建物跡 (大熊)	22
2) 墓 跡 (村松)	23
3) 溝 状 遺 構 (村松)	24
6. 近世 (大熊)	25
1) 近世屋敷地	25
2) 道 状 遺 構	26
3) 土 墓 群	26
III まとめ (大熊)	27

挿図目次

- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 第1図 周辺遺跡分布図 | 第37図 4号墓実測図 |
| 第2図 遺跡周辺地形図 | 第38図 5号墓実測図 |
| 第3図 遺構全体図(1) | 第39図 6号墓実測図 |
| 第4図 遺構全体図(2) | 第40図 7号墓実測図 |
| 第5図 S Z 01実測図 | 第41図 8号墓実測図 |
| 第6図 S Z 01土層断面図 | 第42図 9・10・11号墓実測図 |
| 第7図 S Z 02実測図 | 第43図 S F 76実測図 |
| 第8図 S Z 03・04実測図 | 第44図 南斜面中世期遺構群 |
| 第9図 S Z 03・04断面図 | 第45図 S H 06・07実測図 |
| 第10図 S Z 05、S F 13・14実測図 | 第46図 S H 08実測図 |
| 第11図 S Z 06実測図 | 第47図 1号集石墓実測図 |
| 第12図 S Z 06(S D72・74)遺物出土状態実測図 | 第48図 1・2・3集石墓実測図 |
| 第13図 S Z 07実測図 | 第49図 4号集石墓実測図 |
| 第14図 S Z 07(S D82)遺物出土状態実測図 | 第50図 S X34・S F99・100、S F35・36実測図 |
| 第15図 S B 01・11実測図 | 第51図 S X37、S X44・45実測図 |
| 第16図 S B 01・11断面図 | 第52図 S X39、S X40・41・42・43実測図 |
| 第17図 S B 02実測図 | 第53図 S D86・87土層断面図 |
| 第18図 S B 03実測図 | 第54図 S D81実測図 |
| 第19図 S B 04実測図 | 第55図 近世屋敷地全体図 |
| 第20図 S B 05実測図 | 第56図 近世屋敷地内遺構実測図 |
| 第21図 S B 06実測図 | 第57図 S H 01実測図 |
| 第22図 S B 07実測図 | 第58図 繩文土器実測図(1) |
| 第23図 S B 08実測図 | 第59図 繩文土器実測図(2) |
| 第24図 S H 02・03実測図 | 第60図 土製品実測図 |
| 第25図 S H 04実測図 | 第61図 繩文土器実測図(3) |
| 第26図 S H 05実測図 | 第62図 繩文土器実測図(4) |
| 第27図 次郎丸1号墳全体図 | 第63図 繩文土器実測図(5) |
| 第28図 次郎丸1号墳S F 01実測図 | 第64図 繩文・弥生土器実測図 |
| 第29図 S D 117実測図 | 第65図 石器実測図(1) |
| 第30図 S B 10実測図 | 第66図 石器実測図(2) |
| 第31図 S B 09実測図 | 第67図 石器実測図(3) |
| 第32図 S B 12実測図 | 第68図 石器実測図(4) |
| 第33図 S B 13実測図 | 第69図 S Z 01・03・04・06出土遺物実測図 |
| 第34図 原横穴群全体図 | 第70図 S Z 06(S D72)出土遺物実測図 |
| 第35図 1号墓・2号墓実測図 | 第71図 S Z 06(S D72・74)出土遺物実測図 |
| 第36図 3号墓実測図 | 第72図 S Z 07(S D82)出土遺物実測図(1) |

第73図	S Z07(S D82)出土遺物実測図(2)	第83図	原横穴群出土遺物実測図(5)5号墓
第74図	S Z07(S D82)出土遺物実測図(3)	第84図	原横穴群出土遺物実測図(6)5号墓
第75図	S Z07(S D83)出土遺物実測図	第85図	原横穴群出土遺物実測図(7)6号墓
第76図	S Z13・14, S D63出土遺物実測図	第86図	原横穴群出土遺物実測図(8)6号墓
第77図	S D117出土遺物実測図	第87図	原横穴群出土遺物実測図(9)6号墓
第78図	S B09・10・12, S F76出土遺物実測図	第88図	原横穴群出土遺物実測図(10)7号墓
第79図	原横穴群出土遺物実測図(1)1・2号墓	第89図	原横穴群出土遺物実測図(11)7号墓
第80図	原横穴群出土遺物実測図(2)1・2号墓	第90図	原横穴群出土遺物実測図(12)7号墓
第81図	原横穴群出土遺物実測図(3)3号墓	第91図	原横穴群出土遺物実測図(13)8~11号墓
第82図	原横穴群出土遺物実測図(4)4・5号墓		

写真図版目次

図版1	調査地全景(北東から)		S Z07 完掘状態(東から)
図版2	調査地全景:北側(垂直)	図版14	S Z07: S F107完掘状態(南から)
図版3	調査地全景:南側(垂直)		S Z07: S F112完掘状態(東から)
図版4	原横穴群全景(南東から)		S Z07: S F108・112完掘状態(南から)
図版5	調査地全景:北側(東から)	図版15	S F13 土器棺出土状態(南から)
	調査地全景:南側(東から)		S F14 土器棺出土状態(南から)
図版6	調査地北方部分(南から)	図版16	S B01 床面状態(西から)
	土器が多く出土した谷(西から)		S B01・11 完掘状態(東から)
図版7	S Z01 完掘状態(北から)	図版17	S B02 完掘状態(東から)
	S Z01: S F49・S F50・S F51		S B03 完掘状態(北東から)
	完掘状態(西から)	図版18	S B04 完掘状態(西から)
	S Z01: S F50完掘状態(北から)		S B05 完掘状態(東から)
図版8	S Z02 完掘状態(東から)	図版19	S B06 完掘状態(東から)
	S Z02 完掘状態(南から)		S B07 完掘状態(東から)
図版9	S Z03 完掘状態(東から)	図版20	S B08 完掘状態(南から)
	S Z03 完掘状態(南から)		S B08 完掘状態(東から)
図版10	S Z04 完掘状態(北から)	図版21	S H02 完掘状態(北から)
	S Z04 完掘状態(東から)		S H03 完掘状態(北から)
図版11	S Z06 完掘状態(南から)	図版22	次郎丸1号墳 全景(北から)
	S Z06 完掘状態(北から)		次郎丸1号墳、土壤墓完掘状態(南から)
図版12	S Z07 遺物出土状態(北から)		S F45 完掘状態(北から)
	S Z07: S D82遺物出土状態(北から)	図版23	次郎丸1号墳: S F01棺床検出状態 (南から)
	S Z07: S D83遺物出土状態(東から)		次郎丸1号墳: S F01完掘状態(南から)
図版13	S Z07 完掘状態(北から)		

- | | | | |
|------|--|------|---|
| 図版24 | S D117 遺物出土状態(南西から)
S D117 完掘状態(北東から) | 図版39 | 8号墓 全景(南東から)
8号墓 磨床状態(東から)
8号墓 遺物出土状態(東から)
8号墓 完掘状態(南東から) |
| 図版25 | S D117 完掘状態(南西から)
S F115・116 完掘状態(南から) | 図版40 | 9号墓 遺物出土状態(南東から)
9号墓 完掘状態(南東から)
10号墓 玄室奥残存状態(東から) |
| 図版26 | S B09 完掘状態(南から)
S B09 完掘状態(東から) | 図版41 | 11号墓 磨床状態(東から)
S F76 磨床、遺物出土状態(北から) |
| 図版27 | S B09 龜周辺遭物出土状態(南から)
S B09 龜残存状態(南から)
S B09 龜部分完掘状態(南から) | 図版42 | 南斜面中世期遭構群(東から)
S D86・87 完掘状態(西から) |
| 図版28 | S B12 完掘状態(南から)
S P1728 遺物出土状態(北西から) | 図版43 | S D86 完掘状態(南から)
S D86 完掘状態:斜面部分(南から) |
| 図版29 | S B10 完掘状態(南から)
S B13 完掘状態(東から) | 図版44 | H・I-24グリッド周辺(南から)
S X40~43等 完掘状態(南から)
S H06 完掘状態(西から) |
| 図版30 | 原横穴群全景(南から)
原横穴群全景(南西から) | 図版45 | S H08 完掘状態(南から)
S H08周辺(東から) |
| 図版31 | 1・2号墓と墓前域 遺物出土状態
(南から)
1号墓 完掘状態(南から)
2号墓 完掘状態(南から) | 図版46 | S P2191(S H08)遺物出土状態(南から)
S P2213(S H08)遺物出土状態(南から)
S P2224(S H08)柱根出土状態(南から) |
| 図版32 | 4・5・6号墓 全景(南東から)
5・7・8・9号墓 全景(南東から) | 図版47 | 1号集石墓 集石残存状態(南から)
1号集石墓 遺構完掘状態(南から) |
| 図版33 | 3号墓 閉塞石等出土状態(南から)
3号墓 玄室内板石敷、
遺物出土状態(南から)
3号墓 完掘状態(南から) | 図版48 | 2号集石墓 検出状態(南から)
4号集石墓 検出状態(南から)
S X39 磨出土状態(北から) |
| 図版34 | 4号墓 遺物出土状態(南東から)
4号墓 完掘状態(南東から) | 図版49 | S X37 完掘状態(南から)
S X34・S F98 完掘状態(南から)
S X44 完掘状態(南から) |
| 図版35 | 5号墓 遺物出土状態(南東から)
5号墓 磨床、遺物出土状態(南東から)
5号墓 玄室内遭物出土状態(南東から)
5号墓 完掘状態(南東から) | 図版50 | 近世屋敷地 全景(北から)
近世屋敷地 全景(西から) |
| 図版36 | 6号墓 遺物出土状態(南から)
6号墓 遺物出土状態(北から)
6号墓 完掘状態(南東から) | 図版51 | 近世屋敷地 全景(東から)
S H01 完掘状態(西から) |
| 図版37 | 7号墓 閉塞石等出土状態(南東から)
7号墓 閉塞石検出状態(南東から)
7号墓 美道遭物出土状態(南東から) | 図版52 | S X02 完掘状態(南から)
S X02 完掘状態(西から)
S X02 磨出土状態(西から) |
| 図版38 | 7号墓 板石敷棺床:上段(南東から)
7号墓 板石敷棺床:下段(南東から)
7号墓 完掘状態(南東から) | 図版53 | S F03・04 完掘状態(西から)
S F07・08 完掘状態(西から)
S F09・10 完掘状態(南から) |
| | | 図版54 | S F04・05, S E04・05・06 |

	完掘状態(南から)	図版69 弥生土器(3)
	炭焼窯 完掘状態(南から)	図版70 弥生土器(4)
図版55	S D33 完掘状態(西から)	図版71 弥生土器(5)
	S D36 完掘状態(西から)	図版72 S D117出土土器
	S D35・36・57等 完掘状態(南から)	図版73 S B09出土土器
図版56	S D31 完掘状態(南から)	図版74 S B12・S F76出土土器、 弥生時代管玉、綠釉陶器
	S D78・80 完掘状態(南から)	
図版57	近世土壤墓群(東から)	図版75 原横穴群出土遺物(1)
	近世土壤墓 遺物出土状態(東から)	図版76 原横穴群出土遺物(2)
図版58	縄文土器(1)	図版77 原横穴群出土遺物(3)
図版59	縄文土器(2)	図版78 原横穴群出土遺物(4)
図版60	縄文土器(3)	図版79 原横穴群出土遺物(5)
図版61	縄文土器(4)	図版80 原横穴群出土遺物(6)
図版62	縄文土器(5)	図版81 原横穴群出土遺物(7)
図版63	縄文・弥生土器	図版82 原横穴群出土遺物(8)
図版64	土製品・石器(1)	図版83 原横穴群出土遺物(9)
図版65	石器(2)	図版84 原横穴群出土遺物(10)
図版66	石器(3)	図版85 原横穴群出土遺物(11)
図版67	弥生土器(1)	図版86 原横穴群出土遺物(12)
図版68	弥生土器(2)	図版87 原横穴群出土遺物(13)

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経過と調査の目的

掛川市は、昭和63年に東海道新幹線掛川駅が開業し、平成3年に東名高速道路掛川インターチェンジが共用開始された。そして、それに伴うように工業団地の造成や、住宅団地造成、土地区画整理事業が行われている。人口もこの10年で急速に増加し、平成12年には人口8万人を越えた。

原遺跡調査の契機は、中心市街地の西北、倉真川と国道1号線掛川バイパスの間の、大池地区と上西郷地区、下西郷地区にまたがり計画された、掛川市上屋敷・西郷土地区画整理事業である。

昭和63年(1988)7月5日付で掛川市役所区画整理課より、仮称西谷田土地区画整理事業(現掛川市上屋敷・西郷土地区画整理事業)の計画予定地内の遺跡の有無の確認についての依頼が掛川市教育委員会に提出された。そして平成3年8月8日付で、不動ヶ谷古墳群・原遺跡・次郎丸1号墳を含む周知の遺跡が存在する旨の回答がされ、発掘調査は、区画整理事業により破壊を免れない遺跡について記録保存を目的として行うこととした。調査の実施は、平成5・6年度に不動ヶ谷遺跡および不動ヶ谷古墳群の現地調査を行い、平成6・7年度に原遺跡および原横穴群、次郎丸1号墳の現地調査を行うこととなった。

2. 調査の方法と経過

原遺跡の所在する丘陵上は概ね平坦であり、台地状を呈する。調査前は茶畑となっていた。遺跡の依存状況を確認するため、台地上にトレンチを東西方向・南北方向に入れた。得られた情報をもとに状況を踏まえ、バックホーを使い表土層を除去、その後人工で精査を行い遺構の検出、掘削を行った。

現地での図面作成は、10m方眼のグリッドを方位に合わせて設定し、それを元に図化対象の状況により1/10縮尺、1/20縮尺等を使い分け行った。なお、グリッド杭設置は、㈱フジヤマに委託した。

調査は、台地上にトレンチを掘削し遺跡の状況を踏まえて、表土を重機を使い除去した。そして、人工により、遺構の有無等を探った。記録は遺構の状況により1/10縮尺と1/20縮尺を併用した。写真撮影はプロニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒・カラーリバーサルを用いた。

また、現地調査完了時に、ラジコンヘリコプターによる調査区全体の空中写真撮影および空中写真測量を行った。空中写真測量では、1/20縮尺(一部1/40縮尺)の遺構全体平面図を作成した。

3. 遺跡をめぐる環境

1) 立地

原遺跡は、掛川市街地の北方、倉真川右岸の丘陵上に位置する。南方には逆川により形成された沖積地が、東側には倉真川と初馬川により形成された沖積地が広がっている。原遺跡の立地する丘陵は標高約40mを測る、幅70~80mの台地状となっている。

2) 周辺遺跡の状況(第1図)

原遺跡周辺で縄文時代の遺跡として周知されているものは少ない。平成元~2年度に調査された52ヶ谷遺跡では、押型文土器が出土しているが遺構は不明である。堅穴住居跡は中期のものが複数見つかっている。26不動ヶ谷遺跡では中期後半と後期後半と考えられる土器片が少量出土している。遺跡地北方に存在する6平塚山遺跡は、倉真川の形成した沖積地にうかぶ独立丘陵に立地する。縄文時代後期の遺跡とされるが未調査である。

現時点で市内における稻作文化の黎明を示すものは、袋井市と境を接する原野谷川左岸の原川・領家地区に所在する原川遺跡で丸子式に比定される甕2口を合わせた土器棺墓である。市内の弥生時代後期～古墳時代初頭に位置づけられる集落跡は比較的多く見られるが、それを遡る時期としては、満水地区に所在する大六山遺跡の平成5年に行われた調査で、中期後葉の集落跡が検出されている。さらに、領家地内の領家遺跡では、県営小笠山総合運動公園へのアクセス道新設に伴い近年実施された調査で、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、水田跡等が見つかっている。

そして、弥生時代の墓跡、特に方形周溝墓は近年調査例が増加している。その立地は丘陵上および低地である。各和地区的山下遺跡は昭和58年度に行われた調査で方形周溝墓17が見つかっている。現在市内で最も古く位置付けられる中期中葉巣巣田期のものを含む。原遺跡の近辺に目を転じると、26不動ヶ谷遺跡では、弥生時代中期中葉から後葉にかけての過渡期の土器を伴う方形周溝墓群が見つかっている。瘦せ尾根上に展開し、急斜面にも造墓するなど特異である。53六ノ坪遺跡では、中期の方形周溝墓3、後期の方形周溝墓7、後期の竪穴住居跡48が発見された。さらに、52源ヶ谷遺跡では後期～古墳時代におよぶ竪穴住居跡および方形周溝墓が発見されている。原遺跡から倉真川と初馬川を挟んで丘陵上に立地する16原新田遺跡では、昭和61年度の調査で後期の集落の一部が発見された。調査地からは竪穴住居跡15、方形周溝墓2、大溝1が検出された。この大溝は環濠と考えられている。天童川以東では他に例がない。さらに、方形周溝墓の主体部から鉄製短剣が見つかっている。また、原新田遺跡の尾根続き南方の丘陵上に立地する17天王山遺跡は昭和42年に調査され、いずれも後期と考えられる竪穴住居跡6が検出された。

掛川市域の古墳の築造は、逆川左岸の丘陵上に占地する63前坪古墳群3号墳に始まる。平成6年に確認調査され、葺石が施された前方後円墳であることがわかった。壺形土器が出土し、4世紀末とされる。その後、和田岡古墳群が形成され、5世紀後半になると、丘陵尾根上に展開する小規模な古墳が散見されるようになる。27不動ヶ谷古墳群は、平成6年度に6基の古墳が調査された。尾根続きの丘陵上に存在する同時期の古墳が、その副葬品の内容により、新進的（大陸的）色合いと伝統的色合いという被葬者の異なる性格が看取でき興味深い。52源ヶ谷遺跡および53六ノ坪遺跡は、古墳時代を通じて集落であったことがわかっている。6世紀前半の竪穴住居跡には竈を持つものが認められた。また、六ノ坪遺跡地内では丘陵の南縁辺から古墳4基が確認されている。築造時期は6世紀前半と考えられている。源ヶ谷古墳群では尾根上に存在する7基の古墳が調査され、時期は中期後半から後期初頭と考えられている。原遺跡北方には6世紀後半～末の7平塚古墳がある。横穴墓が目立つ掛川市域にあって数少ない横穴式石室墳である。原遺跡周辺は飛鳥地区を中心とする横穴墓の集中域である。37岩谷横穴群は昭和63年から平成2年にかけて18基が調査され、6世紀後半から7世紀中葉の造営とされた。32三十八坪横穴群は昭和62年度にA群3基が調査され、6世紀後半の横穴墓とされた。64向山横穴、69山麓山横穴は、6世紀中葉頃の導入期の横穴墓である。さらに、この地域は、68宇洞ヶ谷横穴、66堀ノ内13号墳など有力な古墳や横穴墓が存在しており、掛川の「王家の谷」とも呼ばれている。

奈良時代・平安時代の遺跡の調査例は少ない。53六ノ坪遺跡では溝を巡らせた掘立柱建物跡を中心とした建物群が見つかり、丸瓦・平瓦・鬼瓦と墨書き土器が出土した。また、二彩、三彩、綠釉陶器が出土している。建物群は2グループに抽出されている。この建物群は官衙的施設と考えられる。二彩、三彩は出土例がごく少なく注目される。

中世期の遺跡としては、平成9年度に調査された50蔵人古墳群の調査では、丘陵尾根上に2基の集石墓が発見されている。また、46峯遺跡では、平成3年度に丘陵斜面に形成された中世墳墓群が調査され、横穴墓を転用した墓、やぐら、地下式坑が確認されている。

II 調査の内容

原横穴群と次郎丸古墳群1号墳を含む原遺跡の調査面積は、約20,000m²におよぶ。長年にわたり様々に利用され人の手が入り続けた台地上は、遺構の残りが著しく悪い。そのような状況で発見された遺構は、竪穴住居跡13、掘立柱建物跡8、方形周溝墓7、古墳1、横穴11、溝状遺構118、土壙117、井戸・溜状遺構12、小穴2242、性格不明遺構52を数える。遺物は、コンテナケースで160余りの量になる。

長い年月にわたる人の活動の一端を、時代順に報告していきたい。

1. 繩文時代

原遺跡の広がる台地上で、縄文時代遺物を伴う遺構は確認していない。しかし、調査ではF～I～10グリッドを中心とした位置で検出した東向きに開く谷の埋没土中から、以下に示す多量の縄文時代遺物と少量の弥生時代前期後葉から中期前葉の遺物が出土している。冒頭述べたように台地上で縄文時代の遺構を確認していないが、出土した土器破片に大きなものが含まれること、それぞれの土器の断面がさほど摩耗していないことから、縄文時代中期後半を中心とした時に集落が営まれていたことが想定される。こうした集落との位置関係と土器の出土状況から、谷は土器捨て場としての可能性を持っている。しかし、台地上で縄文時代の遺構を発見できないのは、そこに小規模な集落等の縄文時代遺跡はあったが、弥生時代後期以降になって集落を造るための造成工事を行った結果、縄文時代の営み痕がきれいに失ってしまったとも考えられるので、一概に土器捨て場であったと言い切ることはできない。その為本報告では、谷からの出土遺物として報告することにした。

さて縄文時代遺物は、深さ20cmのコンテナケースに換算しておよそ26箱分の出土があった。その内容は、第58～67図に示したように、土器と土製品、石器に分けられるが、量にして25箱は土器で、土製品は第60図に示したものだけ、石器は第61～67図に示したものとそれ以外の打製石斧の破片や石礫の小破片で、コンテナ1箱に満たないが數多く出土している。以下、図面に従って説明をしていく。

1) 土 器 (第58、59、61～64図)

出土した縄文時代土器の多くは、中期後葉の時期に属するものであるが、ごく少量中期初頭の土器を確認した。そこで本報告では、以下に示す分類で出土土器をまとめて報告することとした。

第Ⅰ群土器 中期前葉の土器群 (第61図16、17)

第Ⅱ群土器 中期後葉に属する土器群と思われるが、中期中葉末期の霧田気を持った土器群

(第61図15、18～26、第63図58)

第Ⅲ群土器 中期後葉の土器群 (第58図1～9、第59図10～13、第61図14、27～36、

第62図37～54、第63図55～57、59～89)

以上、大きく分けて三時期に分類される。なお第Ⅱ群土器は、施文で勝坂Ⅲ式の所謂キャタピラ文が認められる一方で胎土が船元式の土器に似ており、さりとて口縁部文様帶に次期の土器に観られる渦巻文が認められることから中期中葉から後葉か括りに迷う土器群で、第Ⅱ群として包括した。第Ⅲ群土器は、a群=加曾利E3式～4式、b群=里木式、c群=曾利Ⅱ～Ⅲ式期、d群=その他に属されるものと考えて細分した。以下、この分類に従ってそれぞれの土器について説明する。

第Ⅰ群 (第61図16、17)

16、17どちらも集合沈線文系の深鉢形土器の胴部破片で、胎土に砂粒を含みザラザラしている。

第Ⅱ群 (第61図15、18～25、第63図58)

すべて深鉢形土器の破片で15、18、19、22～25は口縁部破片、20、21、58が胴部破片である。

15は、深鉢形土器の口縁部破片で、縄文地文に隆帯貼付が施され、隆帯上に貝殻による押圧が確認できるもので、船元式に属す土器である。隆帯に沿ってヘラ状工具の角を使った細かな押し引き連続刺突が観られ、同施文により口縁が縁取りされている。全体の施文は非常に丁寧で、土器の焼き方も綺麗に仕上がっていいる。

18～21、24～26は隆帯による区画文が特徴の土器である。18、21には、沈線と半裁竹管状工具による押引文の縁取りが観られ、その区画内に縄文あるいは結節縄文施文と半裁竹管状工具による連続刺突文が観られる。22は口縁部に沈線による縁取りが観られ、その下に平行沈線が斜に施される。施文の様子から第Ⅲ群に含まれるかもしない。23～25は口縁直下に沈線による区画文が確認できるものである。23～25は縦位方向の区画になると思われ、24、25には縄文が施されている。58は、断面三角形の細い隆帯が施される胴部破片で、緩い曲線を描いている。

なお、第Ⅱ群土器は冒頭述べたように胎土の具合と器厚が薄いことにおいて船元式的、キャタピラ文が確認できることから勝坂Ⅲ式的、渦巻文と結節縄文が認められることから加曾利E式的要素を兼ね備えたものと観察できる。今後、充分な検討を要するものである。

第Ⅲ群

a群（第58図1～9、第59図10～13、第61図26、31～36、第62図37～54、第63図55～57、62～74、第64図78～89）

谷から出土した土器群中、比較的大きな破片で大きさの復元できた土器は、すべてこのグループ含まれる。比較的器厚の厚い土器群である。

1～4、31～46、54は、口縁部文様帶を有する深鉢形土器で、2は隆帯による区画文をもつ土器である。3は、口縁直下で半裁竹管状工具使用の平行沈線による口縁部文様帶を表出する土器。それ以外は、すべて沈線による区画文で口縁部文様帶を形成している。本群に含まれる土器の多くは口縁の平らなものであるが、43～47は波状口縁土器である。

5、6、47～53は無文の口縁部文様帶を持つ土器群で、その下段に隆帯や沈線文等によって胴部文様帶を形成する。なお、口縁部文様帶直下の隆帯上には、51、52に観られるようなヘラ状工具による刻みが施されるものが多い。同様の例は62～64にも観られ、41、42では円形の刺突が施される。

55～57は口縁部文様帶のない土器群で、55は逆U字の沈線文とその内側に縄文施文の観られる土器で、56は口縁部直下に逆U字の沈線文のみ、57は縄文施文後ナデによって消された状況を確認できるものである。

62～74は深鉢形土器の胴部破片で、隆帯や沈線による文様の表出や櫛状工具による曲線文が観られるもの、地文に縄文が施されるものなどを示した。

78～80は、把手付きの深鉢形土器である。78は、地文に縄文が施され、そこに沈線による文様と半裁竹管状工具による平行沈線で縁取りをするもの。79、80では、粘土貼付により把手と突起を表している。

81～85は、深鉢形土器の底部破片で、85の底には網代痕が確認できる。

86～89は、台付深鉢形土器の台部破片で、86と89の二通りの形態が認められる。

b群（第61図27～30）

何れも深鉢形土器の口縁部破片で、口唇部に横位沈線と2～3状の連弧文が認められるものである。このグループのものは、比較的器厚の薄い土器である。

c群（第63図59～61）

器厚の厚い土器で、胎土に砂粒が多く含まれザラザラしている。59は、平行沈線文の地文に細い波

状の隆帯浮文が観られる土器で、60、61は羽状の沈線が施される土器である。

d群（第61図14、第64図75～77）

14は、口縁部径が土器肩部の幅よりも小さな壺状の土器破片で、半裁竹管状工具による平行沈線文が施される。75～77は、器厚が薄く、色調、平行沈線の状況から同一個体の可能性のある土器群である。

2) 土 製 品（第60図）

土器以外の土製品として土製円盤が9点出土しており、第60図に示した。すべて土器破片を利用したものと考えられ、その形状、器面の文様等から製作時期は、前節で報告した大半の土器が属す縄文時代中期後葉の時期ものと考える。今回出土した土製円盤の大きさは、第60図を観て分かるように、大きさでは直径7cm前後のものと直径約3cm前後のものの二通りがある。また、重さにおいては10g前後と5g前後の二通りがあることが分かる。以下、個々の資料について説明を加える。

103は最も大きな土製円盤で、形状は不整方形にも見て取れるが不整円形として報告する。最大長7.1cm、最小長6.7cm、厚さ約1cm、重さ41.75gを測る。器面は無文で、端部に切り込みなどの構は確認していない。大きいためか土器の反りが残っており、端部は四角く仕上げられていたようである。

104は梢円形で、最大長3.8cm、最小長3cm、厚さ0.7cm、重さ8.35gを測る。器面には、土器の隆帯とそれに沿う沈線が認められる。断面の形状は、四角と考えたい。

105は、最大長3.4cm、最小長3.1cm、厚さ0.9cm、重さ10.3gを測り、形はほぼ円形を呈す。器面は無文で、端部は丸くなっている。

106は、最大長3.2cm、最小長約3cm、厚さ0.8cm、重さ6.15gを測り、形はほぼ円形を呈す。器面は無文で、端部は丸くなっている。

107は、最大長約3cm、最小長2.8cm、厚さ0.8cm、重さ7.6gを測り、形はほぼ正円形を呈す。器面は無文で、端部は丸くなっている。

108は、最大長2.8cm、最小長2.7cm、厚さ0.6cm、重さ3.9gを測り、形は不整円形を呈す。器面は無文で、端部は四角く仕上げられていたものと考える。

109は、最大長2.7cm、最小長2.6cm、厚さ1cm、重さ8.1gを測り、形は不整円形を呈す。器面は無文で、端部は丸みを帯びるが四角く仕上げられている。

110は、最大長2.7cm、最小長2.5cm、厚さ0.8cm、重さ5.05gを測り、形は不整円形を呈している。器面は無文で、端部が丸い。

111は、2.5cm、最小長2.4cm、厚さ0.7cm、重さ5.05gを測り、形は不整円形である。器面は無文で、端部が丸い。

3) 石 器（第65～68図）

調査によって出土した石器は、縄文時代に属するものとして石鎌3点、錐状石器1点、玉1点、石匙7点、磨石2点、石皿破片2点、打製石斧5点がある。この他、形態から弥生時代のものと判断する打製石斧5点と磨製石斧2点を確認している。出土地点は、ほとんどの石器がF～I-10グリッドを中心にした位置に広がる谷の埋没土中である。ただし、118が弥生時代中期の土器を伴うS X28、124がSD85、125がSF13からの遺構内出土石器である。以下、それぞれの石器について説明する。

石鎌（第65図112～114）

石鎌は3点出土しているが、すべてチャート製の無茎石鎌である。112は、基部が欠損しているが、残存する重さは2.5gを測る。113と114は基部が直線的で、平面形が三角形を呈し、石鎌として未完成品のようにも観れるものである。113の先端は、少し欠損している。重さは、113が2.7g、114が3.45gを測る。

錐状石器（第65図115）

115については石錐と判断し、圓化して報告した。錐先が欠損するもので、チャート製である。重さは、2.1 gを測る。

玉（第65図116）

116は、形状から環状になる玉と思われる。石材はチャートで、綺麗に仕上げられている。

石匙（第65図117、118、第66図119～123）

形状で、縦型の石匙（117、123）と横型の石匙（118～122）に分けられ、大きさは幅6～8 cmを測る。石材は、121が珪質泥岩の他はすべてチャートである。重さは、117が13.45 g、118が7 g、119が21.75 g、120が16.0 g、121が41.4 g、122が42.1 g、123が32.45 gを測る。

磨石（第67図124他1）

完形品の124と欠損品のもの、あわせて2つ出土している。124が白雲母を含む石英片岩で、側面に敲打痕が認められ、重さは461 gを測る。なお、圓化していない欠損品の磨石は、花崗岩を使用したものである。

石皿（第67図125、126）

どちらも破片で、125は砂岩質の石皿である。126は、幅15～20cm前後、厚さ7～8 cmを測る大きさの石皿である。角閃石の結晶を含む班頬岩でかなりの重量感があり、残存するものだけでも3,100 gを測る。皿部の面は、よく使用されている。

打製石斧（第67図127～131、第68図132～134、他）

127～130が細文時代の打製石斧と考えられ、比較的小さなものである。どれも片面に石の自然面を残す作り方をしている。127は黒色の泥岩で、ばち形を呈し、重さは127 gを測る。128は、緑色片岩で薄く剥離し易いもので、ばち形を呈す。刃部先端は、よく磨かれている。重さは軽くて85 gしかない。129と130は、少し湾曲した短冊形をした砂岩質の打斧で、重さ161 gを測る。

131～134は弥生時代の打製石斧と考えられ、すべて砂岩質の石材で作られていてズッシリと重たい。131は625 g、132は348 g、133は652 g、134は440 gを測る。どれも片面に自然面を残すように作られている。形状は、131～133が短冊形、134がばち形をしていて刃部が磨かれている。

磨製石斧（第67図135、他1）

135は刃部を欠損した大型蛤刃の磨製石斧である。薄緑色をした流紋岩で、残存するものだけでも605 gの重さを測る。各面が良く磨かれ、形の整ったものである。磨製石斧は、135の他に基部のみのものが1点出土しているが、石材は同じ薄緑色をした流紋岩である。

4) その他の遺物（第64図91～102）

その他の遺物として、弥生時代前期後葉の水神平式土器と、少し時間が開いて中期前葉の丸子式期から掛川市原川遺跡出土土器のような時期の土器が出土している。前者には92～96と102が、後者には90、91、97～101が相当する。前者は、口縁の外反が弱く、突帯文のような隆帯とそこに押引き文が確認できる。後者には口唇端部に沈線状の条痕が認められるなどの特徴がある。

2. 弥生時代

1) 方形周溝墓

方形周溝墓は7基を確認した。それぞれの位置と出土土器について順次述べていく。

S Z01（第5、6、69図）

H-7・8区の段丘の東縁辺部に単独で位置する。東側半分は、削平されている。方形周溝墓を構

成する S D04は、S D03に切られている。規模は溝の内側で東西12m、溝の幅は、1.6~2.4m、深さ0.8~1.3mを測る。南側の溝は、削平を受け浅い。残存する西半分の形状から溝は全周するものの、コーナーは浅くなっていたと推定される。主体部は、5つ確認された。S F49は、掘り方の2/3を失っているが、木棺の小口部分の痕跡が認められた。規模は推定で長軸1.6m、短軸0.8mを測る。S F50は、形状が隅丸長方形で、規模は長軸2.55m、短軸1.15m、深さ0.35mを測る。S F51は、木棺の小口部分の痕跡が認められた。規模は長軸1.8m、短軸1.2m、深さ0.2mを測る。S F52は、形状が梢円形で、規模は長軸0.98m、短軸0.88mを測る。S F53は、形状が隅丸長方形で、規模は長軸1.9m、短軸1.1m、深さ0.26mを測る。

出土遺物は、S D04から出土した第69図136~138である。図示できた遺物はわずかである。136、137は壺の口縁部で、外側端部は突帯状になっている。口唇部は面をもち、内外面に刻みが施されている。136の内側は、ヘラによる文様が施されている。138は、壺の口縁部である。内面は櫛描波状文が施されている。主体部の出土遺物は、S F50から弥生土器の小片が認められただけである。

S Z02 (第7図)

C・D-12・13区に位置する。S D10、11、12、36によって区画されているが、S D36は溝の幅や形状から方形周溝墓の溝となるか疑問が残る。規模は溝の内側で東西9.4m、南北推定8mを測る。方形周溝墓の形状は、溝の4隅が切れるものである。S D10は最大幅2.2m、深さ0.3m、S D11は幅2m、深さ0.4m、S D12は最大幅2m、深さ0.12mを測る。主体部は中央に位置するS P202である。規模は長径1.08m、短径1m、深さ0.07mを測る。

出土遺物は、それぞれの溝から弥生土器の小片が出土しているが、図示できるものはなかった。

S Z03 (第8、9、69図)

B・C-13区に位置する。S D18、59、60によって区画されている。S Z04の溝であるS D14にS D60は切られている。規模は溝の内側で南北5.5m、東西5.2mと小型である。S D18の南東部は、小穴があるためにL字につながっているように見えるが、本来は独立した2本の溝であったと考えられる。よってS Z03は、溝の4隅が切れる形態の方形周溝墓であったと推定される。S D18は、幅1m、深さ0.29m、S D59は推定幅0.75m、深さ27cm、S D60は幅1.2m、深さ0.6mを測る。主体部は中央に位置するS F47である。長軸1.75m、短軸0.8m、深さ0.05mを測る。木棺の痕跡が認められた。

出土遺物は、S D18から出土した第69図139の壺の胴部下半である。S D59は、出土遺物が認められず、またS D60から出土したものは小片で図示できなかった。

S Z04 (第8、9、69図)

調査区中央の西縁辺部のB・C-13・14区に位置する。S D13、14、15、16によって区画されている。S D16はS D31に切られている。規模は溝の内側で、南北11.9m、東西12.2mを測る。方形周溝墓の形状は、溝の4隅が切れるものである。S D13は幅2.5m、深さ0.6m、S D14は幅2.5m、深さ0.6m、S D15は幅2m、深さ0.9m、S D16は幅1.1m、深さ0.3mを測る。S D16は斜面地に掘削されているため、他の溝と比較し残りが悪い。主体部は、認められなかった。

出土遺物は、第69図140~145である。140~142は、S D14から出土した。140、141は壺の胴部である。140は下膨れ形で、縦位と横位のヘラ磨きが施されている。141は、胴部中位で最大径をもち、そこが強く屈折している。底部は、欠損している。142は高窓の口縁部である。口縁部は屈折した後、緩やかに外反している。143~145はS D15から出土した。143は壺の肩部で、平行沈線の下に突帯が施されている。144は壺の口縁部である。口唇部は面をもち、内外面に刻みが施されている。口唇部と外面は、条痕調整されている。145は壺の頸部である。斜位の条痕が施されている。

S Z05 (第10図)

調査区中央の東縁辺部G—13・14区に位置する。東側が谷に面しているためか、東側の溝は確認できなかった。そのためSD41は、谷に向かってコの字形を呈している。SD42とは切り合い関係をもつ。規模は溝の内側で南北5.6mを測る。SD41は幅1.4m、深さ0.16を測る。出土遺物は、小片で図示できなかった。

S Z06 (第11、12、69、70、71図)

段丘東縁辺部のI—17・18区に位置する。SD72、74、75によって区画されている。東側は削平を受けており、SD72、75の東端部と東側の溝は確認されなかった。規模は、溝の内側で南北9.2mを測る。方形周溝墓の形状は、溝の4隅が切れるものであると推定される。SD72は幅2.4m、深さ0.58m、SD74は幅2m、深さ0.5m、SD75は幅2m、深さ0.4mを測る。主体部は確認されなかった。

遺物は、SD72と74から多量に出土した。出土状態図は、第12図である。土器実測図は第69～71図の146～186に示したが、その中でSD72から出土したものは、146～181である。146～158は壺である。146は壺の上半部である。頸部は短く、口縁部はわずかに開く。文様は、縦位の刷毛調整のうちに1本1単位の櫛描きにより連弧文をはさむ横線文を施している。147は短い頸部で、口縁部は緩やかに開くものである。口唇部には、面をもつ。口縁部は縦刷毛調整が行なわれた後、わずかにヘラ磨きが施されている。肩部には、櫛描き横線文が施されている。148は頸部が短く、口縁部は屈曲して開くものである。151は比較的長い頸部で、口縁部は緩やかに開くものである。文様は頸部に竹管状工具による刺突文を施し、胸部上半は櫛描き横線文の上に櫛描き波状文を施している。152は下膨れ形の胴部をもつ壺である。胴部上半には刷毛調整のうち、多段の横線文に丁字文を加えている。文様帶の最下部には櫛描き波状文を施している。153は、受け口壺の口縁部である。口縁部には横位のヘラ磨きが施されている。155は胴部下半で強く屈折する壺で、156は丸い胴部の小型壺である。157、158は小型壺の底部である。159は小型の鉢である。160～174は壺である。160～163は台付壺の台部である。160、161は直線的に下方に開くものである。162は内湾し、端部には面をもつ。163は逆八の字形に開く台部である。162、163は弥生時代後期菊川様式から古墳時代前期三沢西原様式の可能性が考えられる。165は、口唇部を欠損する壺の胴部である。口縁部は、緩やかに屈折している。外面は、縦位の刷毛調整が行なわれている。166は、口縁部を欠損する壺の胴部である。胴部中位に最大径を有する。頸部には縦位、胸部には横位の刷毛調整が行なわれている。167は、口縁部が強く屈折し外反するものである。外面は縦位の刷毛調整を行なっている。168は、口縁部がわずかに屈折し、外反するものである。口唇部は面をもち、下方に垂下する。外面には刻みが施されている。胴部外面は縦位の刷毛調整を行なっている。169は、口縁部が強く屈折し外反するものである。口唇部は面をもち、内外面に刻みが施されている。174は、小型の台付壺である。片口にされている。170～173は壺の胴部破片である。170は、櫛描き横線文の間に鰐齒文を施している。171は、ヘラ描き鰐齒文の下にヘラ描きの波状文を施している。172は櫛描き横線文の下方に波状文を施している。173は、擬似流水文を施していると思われる。

方形周溝墓が造られた時期より先行する土器群が、175～180である。175は幅の広い櫛状工具による横線文と波状文を施している。176は縦文を施した後、ヘラ描き波状文を施している。177は、壺の口縁部である。口唇部は斜位の条痕で面取りされ、垂下する。内側に刻みが施されている。178は斜位の条痕調整が行なわれている。179は、櫛描き横線文の上に縦位のヘラ描き文を施している。180は、壺の口縁部である。口唇部は刷毛で面取りされ、内側に刻みが施されている。外面は縦位の刷毛調整を行なっている。181は、S字壺の口縁部である。

182～186はSD74から出土した。182、183は壺である。182は、頸部が短く、口縁部が緩やかに外反

するものである。口唇部はナデ調整である。外面は縦位の刷毛調整が行なわれている。183は、壺の胸部破片であり、肩部が少し張るものである。3段の櫛描き横線文が施されている。184～186は甕である。184は、口縁部が強く屈折し外反するものである。口唇部は面をもつ。頸部は縦位、胸部は横位の刷毛調整が行なわれている。胸部中位に最大径を有する。185は、口縁部が強く屈折し大きく外反するものである。口唇部外側に刻みが施されている。胸部は張りがなく、やや長胴になりそうである。186は、甕の口縁部である。口唇部は繩文が施され、内外面に刻みをもつ。外面は、斜位の条痕調整である。

S Z07 (第13、14、72～75図)

段丘南端部に近いD・E・F-18・19・20区に位置する。S D82、83、84、85によって区画されている。規模は溝の内側で南北14m、東西14.7mと、今回の調査で確認された方形周溝墓の中では最大である。方形周溝墓の形状は、溝の4隅が切れるものである。S D82は幅3.15m、深さ0.35m、S D83は幅3.85m、深さ0.8m、S D84は幅3.5m、深さ0.4m、S D85は推定幅2.4m、深さ0.1mを測る。S D85は削平を受けているため、残りが悪い。主体部は、3基確認された。S F107は溝で区画された内側のほぼ中央に位置する。規模は長軸3.1m、短軸1.4m、深さ7cmを測る。S F108は、周溝内側の北東部に位置する。規模は長軸3m、短軸1.1m、深さ0.1mを測る。S F112は、北東の陸橋部に位置する。規模は長軸3.2m、短軸1m、深さ0.15mを測る。

出土遺物は、第72～75図の187～235である。S D82からは、特に大量の土器が出土した。出土状態図は、第14図である。187～198は壺である。187は、頸部が強く屈折し、口縁部が開くものである。口唇部は面取りされ、頸部は櫛描き横線文が施されている。188は、口縁部が緩やかに大きく外反するもので、外面は縦位のヘラ磨き調整が行なわれている。189は長い頸部をもつもので、胸部には櫛描き横線文を4段施している。190、191は口縁部を欠損する下膨れの胸部をもつ甕である。190は、胸部下半にはヘラ磨き、その上部には刷毛調整を行なっている。192～195は、大型で太頸の甕である。192、194、195は受け口状口縁をもつ。192は、短い受け口が内傾している。胸部は頸部から大きく開き、中位に最大径を有する。頸部から胸部中位にかけては縦位の刷毛、胸部下半は横位の刷毛、底部付近ではヘラ磨き調整が行なわれている。194は、受け口が直立し、頸部は強く屈折し大きく開くものである。頸部は縦位の刷毛調整が施されている。195も、受け口状口縁部であるが、その内面は強く屈折していない。頸部に棒状工具による刺突文、その下に櫛描き横線文を施した上にヘラ描き沈線を斜位に施している。196は、下膨れの胸部で頸部に櫛描き横線文、胸部上半には断続的な縦位の櫛描き文を4方向に施している。197は、球形に近い胸部をもつ甕である。

199～211は甕である。199は、口縁部が緩やかに屈折し、外反するものである。口唇部外側に刻みが施されている。胸部は長胴である。200は、口縁部が緩やかに屈折し、外反するものである。口唇部には刻みが施され、外面は縦位の刷毛調整が行なわれている。胸部は長胴である。201～203は、口縁部が強く屈折し、外反するものである。口唇部には刻みが施されている。203の胸部は、上位で屈折している。205、206は口縁部が短く、わずかに外反するものである。口唇部には刻みが施されている。207は小型の甕の胸部で、長胴である。208～211は台付甕の台部である。211は、弥生時代後期菊川様式の可能性が考えられる。

212～215は、高坏である。212は、口縁部が緩やかに屈折し外反するものである。口縁部内面には段をもつ。213～215は高坏の脚部である。215は端部の段が内傾している。

方形周溝墓の造られた時期より先行する土器群が、216～224である。216は、壺の口縁部である。口唇部には刻みが施され、内面は横位、外面は縦位の刷毛調整が行なわれている。217～220は甕の口縁

部である。217は、口唇部が条痕で面取りされ、外面は横位の条痕が施されている。218は、口唇部が垂下し、内面に刻みが施されている。口唇部と外面は刷毛調整である。219は、口唇部と内面に繩文が施されている。外面は斜位、内面は横位の条痕が施されている。220は、口唇部内外面に刻みをもつ。外面は横位の条痕が施されている。221、222は壺の胸部片である。221は櫛描き文を地文とし、ヘラ描き沈線を施している。222は、櫛描き横線文を施した後、縦位のヘラ描き沈線、連弧文を施している。223、224は壺の口縁部である。223は口唇部が面取りされ、刻みが施されている。外面は横位の刷毛調整が行なわれている。224は、口唇部が棒状工具による刻みが施されている。外面は、ナデ調整である。

225～232はS D83から出土した。225は長い頸部をもち、口縁部がわずかに外反するものである。胸部は下膨れである。口縁部から胸部下半まで縦位の刷毛調整が行なわれている。226は、口縁部が緩やかに屈折し外反するものである。胸部は下膨れである。227は、細頭の受け口状口縁の壺である。胸部上半は、櫛描き横線文を施し、上段にはその上に縦位のヘラ描き沈線を施している。横線文の下段には、ヘラ描き羽状文が施されている。228は球形の胸部をもつ壺である。刷毛調整ののち、文様が施され、最後にヘラ磨き調整が行なわれている。胸部上半は欠損しているが、U字形に4分割された内側に2つの連弧文が描かれている。229は胸部下半が強く屈折し、算盤玉に近い形状の壺である。231、232は甕である。231は、口縁部は短く緩やかに外反するものである。口唇部は刻みが施されている。口縁部外面は刷毛調整ののちナデ調整されている。胸部は斜位の刷毛調整が行なわれている。232は台付甕の台部である。

233、234はS F107から出土した管玉である。ともに石材は、グリーンタフである。233は、長径6.8mm、短径2.2mmを測る。234は長径6.8mm、短径2mmを測る。235はS F112から出土した管玉である。石材はグリーンタフである。長径7.9mm、短径1.9mmを測る。

ここで簡単に方形周溝墓の築造時期について述べておきたい。確認された7基の方形周溝墓はすべて、弥生時代中期後葉で、土器様式は白岩式の範疇に収まると考えられる。S Z01から出土し、図示した小片の遺物は、方形周溝墓に先行する時期のものであり、また方形周溝墓の形状が溝の4隅が切れるものでないことから白岩式でも新しい段階であると推定される。同様に出土遺物が図示できなかったS Z05も、溝の形状からS Z01と同時期であると考えられる。S Z03、04は、出土遺物は少ないものの壺の胸部形態などから白岩式の新しい要素をもつものである。多量の土器が出土したS Z06、07は、白岩式の中段階としていいだろう。S Z06は、S Z07よりやや先行する可能性も考えられる。

また、方形周溝墓に先行する土器群が数多く出土していることから、これらの時期について若干ふれておきたい。175は、弥生時代中期前葉の丸子式もしくは中葉の嶺田式ではあるが、やや古い要素をもつものである。中期中葉の嶺田式に比定されるものは、143～145、186、216～220である。嶺田式もしくは白岩式の古段階に位置付けられるものは、136、137、176～180、221である。白岩式古段階に比定されるものは、138、222、223の土器である。これらの時期に該当する明確な遺構を今回の調査では、認めることができなかった。原遺跡においては、先行する時期の遺構が後世の遺構により一部壊されていることが認められ、中期中葉～後葉の古い段階もなんらかの形でこの丘陵が利用されていたといえるだろう。

2) 土器 棺

S Z03の南側、D-13・14区に2基の土器棺が確認された。

S F13(第8、10、76図)

掘り方は円形で、規模は、長径65cm、短径55cm、深さ20cmを測る。大型の壺(第76図236)が正位の

状態で埋納されていた。開墾や耕作等により上半部は、すでに失われていた。内部には拳大の石が認められた。壺の最大径は50cmを測る。外面は上位が縦位、下半部は斜位の刷毛調整が行なわれている。

S F14 (第8、10、76図)

掘り方は円形で、規模は長径80cm、短径75cm、深さ50cmを測る。壺の胴部を身とし、壺の上部を蓋としていたようである。第76図237は蓋となっていた壺である。口縁部は強く屈折し、外反するものである。口唇部は丸く仕上げられ、刻みが施されている。胴部は縦位と斜位の刷毛調整が行なわれている。外面には、ススが付着していた。

3) 竪穴住居跡

原遺跡の立地した台地上は、後世の耕作等による削平が行われており、遺構の保存に影響が大きい。竪穴住居の場合も、付随する柱穴や貯蔵穴等比較的深く掘り込まれる土坑だけになってしまっているものの存在が考えられる。そして、多くの時代の遺構が重複する遺跡の状況のため、抽出は困難であった。ここでは、弥生時代に属すると考えられる竪穴住居跡9軒について報告する。

S B01・S B11 (第15・16図、図版16)

台地東側縁辺、E・F—14・15グリッドに位置する。標高は39.7mである。S B11はS B01に切られている。S B01は、東西6.22m、南北5.72mを測る、隅丸方形の平面形の住居である。住居の方向はE—22°—Eを測る。検出した深さは竪穴の掘り方まで15cm以下である。かろうじて3～4cmの厚さで貼床がされている状況が把握できた。壁溝は西側と北側に認められる。S B01の床面検出時に確認したピットは12あり、うち、S P 2、S P 4、S P 9、S P 11の4つがS B01の主柱穴と考えられる。中央やや北西寄りには焼土化した部分が認められ、地床炉の跡と考えられる。S B01と重なり存在したS B11は、掘り方までが10cm程度しか残っていない。掘り方がS B01より浅いため、西側の一部を除いて完全に廻されているようだ。S B01の掘り方まで掘った状況でさらに検出したピットを含め、配置から、S P 1、S P 13、S P 7、S P 12がS B11に伴う主柱穴と考えられる。S B01・11の覆土中からは土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。弥生時代後期のものと思われるが、古墳時代前期に下る可能性もある。

S B02 (第17図、図版17)

台地西側縁辺、B—15・16グリッドに位置する。標高は約39.7mである。大きさは、東4.58m、南北は搅乱されているが、6mほどと推定される。平面形は南北の壁が丸みを持つ長方形である。住居の方向は、磁北から2、3°東に傾く。竪穴の検出した深さは10cm程度であり、炉の痕跡も不明であるため、掘り方の状態と思われる。S B02の範囲からは15のピットが検出された。うち、S P 1370、S P 1372、S P 1378、S P 1380が主柱穴と考えられる。S B02からは弥生土器小片が少量出土している。時期は不明である。

S B03 (第18図、図版17)

台地東側縁辺、G—16グリッドに位置する。標高は約39.2mである。住居の東側は削平され失われている。大きさは、南北が7.18mを測る。平面形は方形か長方形と思われる。炉は痕跡も確認されない。ピットはいくつか検出されたが、付属関係はわからない。S B03に伴う遺物として弥生土器小片が少量出土している。時期は不明である。

S B04 (第19図、図版18)

台地東側縁辺、H—16グリッドに位置する。標高は約38.5mである。現状斜面であり、住居の東側は大きく削平されている。大きさは、南北が5.2mを測る。平面形は方形か長方形と考えられる。土層断面で、5～8cmの厚さで確認された3層は貼床と考えられる。炉は痕跡も確認されない。内部から

検出されたピットのうち、S P 2040とS P 2042は主柱穴と考えられる。S B 04に伴う遺物は弥生土器及び土器小片が少量出土している。どちらの時期に属するのか決め手に欠ける。

S B 05（第20図、図版18）

台地上、D-17グリッドに位置する。標高は約39.5mである。確認できた深さは10cm程度である。大きさは、現状で南北5.36m、東西4.58mを測る。平面形は長方形を基調とし、北側の壁が弧を描くため、小判型だったかもしれない。炉は痕跡も確認していない。検出したのは掘り方と思われる。内部から検出されたピットのうち、S P 1864、S P 1869、S P 2140、S P 1870は主柱穴と考えられる。S B 05からは、弥生土器後期と思われる小片が少量出土している。

S B 06（第21図、図版19）

台地上、東西方向ではほぼ中ほど、E-17グリッドに位置する。標高は約39.5mである。南側は削平され失われている。大きさは、東西は3.97mを測る。検出できた深さは最深で8cmである。平面形は崩れているが、隅丸の方形か長方形なのだろうか。堅穴内部からはピット6が見つかっているが、付属関係は不明である。S B 06に伴う遺物は弥生土器小片が少量ある。時期は不明である。

S B 07（第22図、図版19）

台地西側縁辺、B-18グリッドに位置する。標高は約39.4mである。中近世の溝状遺構などが重複している。大きさは南北5.80m、東西4.49mを測る。平面形は小判型である。検出できた深さは最深で19cmである。遺構北側では貼り床が確認されている。貼り床の厚さは概ね6cmを測る。そして、上層断面の確認で、平面的な範囲は正確につかめていないが、中央やや北寄りに焼土化した部分が認められ、地床炉の跡と考えられる。堅穴内部からはピット9が見つかっている。柱穴と考えられるものもあるが、配置関係がうまくわからない。堅穴の拡張が行われた可能性もある。S B 07に伴う遺物として、弥生時代後期の甕片がある。

S B 08（第23図、図版20）

台地南側縁辺、E-21グリッドに位置する。標高は約38.7mである。南側と西側は残りが特に悪い。大きさは東西5.34mを測り、南北は残存している南東側部分で約5mである。平面形は方形と考えられる。検出できた深さは最深でも15cmである。堅穴内部からはピット16が見つかっている。ピットの形状と配置から、S P 1895、S P 1903、S P 1904、S P 1900が主柱穴と考えられる。S B 08からは、図示できなかったが、弥生時代後期と思われる土器片が出土している。状態は悪く器面が荒れているものが多い。古墳時代に下る可能性もある。

4) 挖立柱建物跡

S H 02（第24図、図版21）

D-13グリッドに位置する。柱間は1間×3間で、大きさは約3.8m×約5.6mある。柱穴列の方向はN-16°-Wである。ピットは長径30cm前後、短径25cm前後の楕円形であり、深さは確認面から16～24cmを測る。底径は15cm程度である。S P 274については、S P 275とS P 277の間でやや東に偏って存在するが、ピットの大きさ、深さが類似し、軸上にちょうど乗ることからこの建物を構成する柱穴と考えた。覆土は概ね黒褐色土の単層であった。

S H 03（第24図、図版21）

E・F-14に位置する。柱間が2間×2間の総柱の建物である。大きさは約3.8m×約4.1m、柱穴列の方向はN-12°-Wである。ピットの規模はS P 397とS P 457を除き、径30cm前後、深さは20～30cmを測る。平面形は不整円もしくは楕円形である。底面径は12～20cmである。S P 401は南北方向、S P 397とS P 406との線上より東側に寄っている。柱間は東西方向が1.85～1.89m、南北方向が2.05mを

測る。覆土は、穴の周囲は地山土を多く含む褐色土で柱を立てたときに埋められ、柱の存在した部分には黒褐色土が流入している。出土遺物は S P 395から弥生時代後期と思われる土器2点が出土したのみである。

S H04 (第25図)

C-18グリッドに位置する。柱間は1間×1間、大きさは約2.35m×約2.5mを測る。方向はN-14°-Wである。ピットの大きさは、平面形が約60cmの不整円で、深さはS P 1386は0.75m、その他は0.4～0.56mを測る。S P 1385とS P 1386の土層断面では、径10～15cmの柱の使用が想定される。S P 1385は東寄りに偏っている。柱間の距離はS P 1888-S P 1889間が2.35m、S P 1386-S P 1889間で2.41mを測る。S H04に直接関わる遺物の出土はなく時期は不明であるが、形態等から弥生時代で扱った。

S H05 (第26図)

D-18グリッドに位置する。柱間は1間×2間、大きさは約2.7m×約3.8mの建物である。方向はN-5°-Wである。ピットは不整円で径は0.65～1m、深さは0.35～0.58mを測る。柱穴間は土層断面観察も参考にし、東西1.92～1.96mと考えた。南北はS P 1437-S P 1442間が2.65m、S P 1449-S P 1446間が2.78mを測る。S P 1437、S P 1444、S P 1446から弥生土器が出土している。

5) 溝状遺構

調査区域内には、多くの溝が検出されているが、そのなかで特異な出土遺物が認められたS D63について簡単に記述する。

S D63 (第5・76図)

S Z01の溝であるS D04とその主体部であるS F50に両端を切られている。検出された規模は、幅60cm、深さ20cm、長さ3mである。遺物は、第76図238の壺上半部が出土している。胸部上位に最大径をもつ長頸壺である。肩部にはヘラ描きの重巻文が7方向に施され、その下にはヘラ描きの波状文が描かれている。また、重巻文の上段にもヘラ描き波状文が施されていたと推定される。胸部下半は粗い継位の刷毛調整が行なわれている。全面に丹塗りが施されている。

3. 古墳時代

1) 次郎丸古墳群

次郎丸1号墳 (第27・28図、図版22・23)

今回調査地の北端、E・F-2・3グリッドに位置する。調査前より周知された古墳である。次郎丸古墳群は3基で構成される、1号墳は古墳群中最も南に位置する。標高は51m、最高所は51.16mを測る。台地上との比高差は約12mである。墳形は明確ではないが、径10mほどの大きさと考えられる。東側は削り出されたように急に落ち込む。北側には尾根を断ち切り墳丘を画す幅2.5mの溝がある。墳頂や南寄りに主体部S F01を検出している。主軸はN-30°-Wである。南端がトレンチで壊されているが、長さ約2.6m、幅0.96m、検出面からの深さ15cmの掘り方である。また、東側は約15cmの深さでテラス状に掘られている。内側はさらに長さ約2.25m、幅0.5m、深さ10cmの2段に掘られ、木棺が直葬されたと考えられる。棺の床には粘質土が使われている(土層断面図3・5層)。また、棺の中と考えられる4層中からは管玉1点が出土している。時期は、5世紀末頃と考えられる。

2) 溝状遺構

S D117 (第29・77図、図版24・25・72)

調査地南端の低地部分、S H08等の中世期の遺構が掘り込まれた面から0.5～0.8m下層で検出された。

M-23グリッドから南西方向、F-27グリッドにかけて位置する。幅はL-24グリッドあたりで、約1.2m、G-27グリッドで約4.3mを測る。深さは確認面から10cm以下から最深で約0.6mである。北東方向から南西方向にゆるく蛇行して流れたようである。底面の傾斜はゆるやかである。

遺物は、コンテナ21箱分が出土している。ほとんどが土師器で、とりわけ高壺が目立つ。祭祀的な行為が行われた溝と考えられる。ここにはそのうちの一部の土師器を報告する。239～241は壺である。239は口径15.5cm、胸部最大径24.7cm、残存高18.8cm、240は推定口径19.5cm、残存高6.5cm、241は口径15.0cm、残存高7.7cmをそれぞれ測る。器面は荒れており、調整は不明である。242は壺である。口縁部、特に口唇の残りが悪いが体部はほぼ完形である。推定口径は7.0cm、胸部最大径9.1cm、器高は9.0cmを測る。胴が張る、須恵器壺を模していると考えられるが、形には歪みがある。器面はやや荒れているが、ていねいになだらかっているようだ。243・244は小型壺である。243は口唇を欠くが、推定口径は約8cm、胸部最大径11.1cm、残存高は9.4cmである。胸部の張る形態である。244は口縁を欠く。胸部最大径10.2cm、残存高8.7cmを測る。どちらも器面は荒れが著しく、調整は不明である。245～250は高壺である。245は口径18.0cm、底径13.7cm、器高は13.0cmを測る。壺部は弱い稜があり、そこから外反し立ち上がる。脚部はやや膨らみを持つもので、外に屈曲し裾は広がる。屈曲部内面は段になっている。246は推定口径16.0cm、残存高11.0cmを測る。壺部は弱い稜があり、やや外反し立ち上がる。脚部は端部を欠く。やや膨らみを見せ、屈曲して裾が広がる。247は推定口径18.0cm、残存高12.0cmを測る。壺部ははっきりした稜を持ち、そこから外反し立ち上がる。脚部は「ハ」の字に開くが、裾を欠いている。248は壺部を屈曲部から欠く。底径12.7cm、残存高9.6cmを測る。脚部は「く」の字に屈曲する。249と250は壺部である。249は口径17.1cmを測る。屈曲の稜はやや弱く、立ち上がりはごく内湾するが、おおむね直線的である。250は口径16.8cmを測る。強い屈曲を見せ、立ち上がりはやや内湾し直線的に立ち上がる。また、脚部との接合部に稜がある。これらの土器の時期は5世紀代と考えられる。

3) 壺穴住居跡

古墳時代後期に属する壺穴住居跡として4軒が検出された。その所在はいずれも台地南側縁辺と南側斜面であった。

S B09 (第30・78図、図版26・27・73)

丘陵南側斜面の上方に位置する。グリッドに位置する。調査時に確認できたプラン（掘り込み）は北側壁からおよそ1/3と考えられる範囲である。中世期にこの地点が墓域にされた時点で削平されたものと考えられる。北側にはSD93がある。出土遺物から中世期の墓域造成に伴う溝と判断されるが、S B09の立地する地点と丘陵面では比高差が1mと大きく、縁辺を削り斜面をテラス状に造成したうえで、壺穴住居S B09を掘り込んだことが考えられる。そして、排水のため溝を切ったものと思われる。後世（中世）の造墓時に、若干なりとも残っていた、その段差を再掘削し、テラスをつくったと考えられる。S B09は北壁に竈を検出している。竈は残りが悪く、天井は削平されている。袖部分は、幅15～28cm、高さ10cmで粘土が残っていた。S B09からの出土遺物は、北東隅（北壁沿い）から土師器壺破片、竈の東側に土師器壺が横倒しの状態で検出した。そして、それに重なる状態で土師器高壺が出土している。さらに焚き口と考えられる部分には土師器壺が残されていた。支脚及びそれに類するものの出土はなかった。その他、西壁付近で土師器高壺が床下6cmから横倒しの状態で出土している。

次に出土遺物の説明をする。251～254は土師器壺である。251は推定口径17.8cmを測る。252は丸底である。胸部最大径が21.4cm、残存高は26.1cmを測る。251と252は接合しないが同一品と考えられる。

253は底部を欠くが丸底と考えられる。口唇も欠く。推定口径は17.4cm、胸部最大径20.0cm、残存高は24.9cmを測る。254は平底である。胴部最大径18.6cm、底部径7.3cm、残存高18.6cmを測る。251～253は外面にタテ・ナナメ方向のハケ、内面は底部付近にナナメハケ、その他にヨコハケが残る。また、252は外面にススの付着が見られる。254は器面が荒れ調整が見えない。255は土師器壺である。口径は15.0cm、底径9.5cm、器高4.6cmを測る。器面は荒れているが、内外面ともヨコナデの痕が残る。器厚は肥厚している。256は土師器高壺である。口縁と脚部端部を欠く。残存高8.9cmを測る。壺部の屈曲は弱い。調整は壺部外面上半にヨコナデの痕が残り、以下は脚部までていねいになでている。壺内部面は中心から外へ向かってハケ目が残る。

S B10 (第30・78図、図版29)

南斜面、E・F—23グリッドに位置する。標高は35mであり、台地上縁辺から約3.5m下のレベルである。S B10と0.8～1.7mの間隔をあけて背後にあるS D103から、斜面地にテラス状の平坦面とした上で住居S B10をつくっている。南側は半分強が削平されている。住居内にピットを6検出している。いずれも柱穴と考えられる。南側が大きく削れているのでよくわからないが、建て替えが行われた可能性を示すものだろうか。竪穴の掘り込みは最も深いところで17cmを測る。検出した底面は30cm近く南へ傾斜しており、当初の姿とは考えられない。中世期の造墓等、後世の搅乱を受けているのだろう。S D103は幅が上場で約1.5m、下場で約0.5mを平面的に測る。斜面を切り下げ平場をつくり、さらに排水を考えているものと思われる。S D103からは、中世以降の陶器が出土しているため、この場所に中世期に何らかの手が入ったものと思われる。しかし、S B10がつくられた時にこの場所が開削された時にテラス状の平場が形づくられ、中世期に2次的に利用されたことが考えられる。

S B10からの遺物は土師器が数点出土している。ある程度形を保ったものが4点あり、住居内や北東寄り、S P1872の西側から出土している。うち、図示したのは壺の底部である。底径6.0cm、残存高は2.8cmを測る。立ち上がりから上が欠落しているが銳角に屈曲するものと思われる。器面は著しく荒れている。

S B12 (第32・78図、図版28・74)

台地上南側縁辺、F—21グリッドに位置する。竪穴の残りはきわめて悪く、北西側の隅がかろうじて検出できた。深さは最深で8cmである。平面図上に破線で表現したプランは、遺構検出時に確認した覆土の範囲である。その範囲内から検出したピットは11ある。主柱は方形に配置されることから想定すると、建て替えが行われたと思われる。南側から検出したS P1728から須恵器壺1と土師器壺2が出土している。推定であるが、想定されるS B12の範囲内であること、まわりの遺構環境から、S P1728は、この住居に伴う貯蔵穴と考えている。

S B12に伴うと考えられるS P1728からの出土品2点を報告する。258は土師器壺である。口径11.7cm、最大径12.9cm、器高4.5cmを測る。ていねいにつくられている。口縁は内外面ともヨコナデの痕が残り、内面の屈曲部以下は、板状の工具により中心から外側へなで、その後横になでている。259は須恵器壺身である。口径12.1cm、最大径13.8cm、器高4.5cmを測る。器厚は厚くシャープさに欠ける。底部外面はヘラ削りされる。

S B13 (第33図、図版29)

台地南側縁辺、F・G—20・21グリッドに位置する。南側は削平されている。大きさは東西7.3m、深さは最深で19cmを測る。方形の竪穴住居と考えられる。北東隅は幅約30cm、深さ約10cmの壁溝があり、さらに間仕切りのように0.8～1.2mの長さの溝が検出されている。北壁中寄りには、スクリーントーンで示した範囲に焼土が散見された。遺構としてははっきりしないが、窓の存在が考えられる。推

定されるS B13の範囲内から9のピットが検出された。このうち、S P1749、S P2000、S P1998は主柱穴と考えられる。S B13からは弥生土器、土師器、須恵器、陶器など様々な時代の遺物があるがどれも小片で量も少ない。竈の存在が考えられることから古墳時代のものとして扱った。

4) 原横穴群

原横穴群は、今回の調査で発見された横穴群である。調査区の北東部に位置する谷に11基の横穴が確認された。横穴群は、南東方向に開口する1～9号墓と、東に開口する10、11号墓の2群に分けることができる。それぞれの横穴の規模、出土遺物は一覧表に示した（P21）。一覧表で示すことができなかった事柄を中心に、補足説明していきたい。

1号墓（第34、35、79図）

玄室床面は、羨道部床面より約10cm高い。玄室の残り状況も良く、閉塞石も存在していたが、出土遺物は、第79図264、265の壺片のみであった。羨道部からの出土である。

2号墓（第34、35、79、80図）

最も谷の奥に位置する横穴である。玄室と羨道部の境がない筒形を呈するもので、規模も小さい。閉塞石は1段のみ確認された。1.6×0.9mの範囲に5～10cm大の礫が敷かれていた。この礫床の上に残されていた遺物が、第79図266～272である。266、267は口径10cm前後の坏蓋である。268～270は、器径10～11cmの坏身である。かえりは短く小さい。271は、壺の頸部片である。272は、土師器の壺である。口径16cm、器高25.8cmを測る。出土土器は、遠江編年のIV期前半に位置づけられる。

1号墓と2号墓の距離は約1.6mであるが、ほぼその中間地点から集中して遺物が出土した。1号墓からの遺物がほとんど確認できなかったことから、1号墓から抜き出された可能性も考えられる。その実測図は、第79、80図の273～301である。273～281は坏蓋、282～292は坏身である。273、274は口径11.6～12cmで、セットになる坏身は器径12.8cmの282、283である。275～279は口径9.5cm前後で、これらとセットになる坏身は、器径10～10.8cmの284～289である。280～281は口径8.5cm前後で、セットになる坏身は器径9.6cmの290～292である。293～297は、高坏である。293～295は半球形坏部高坏である。293の脚部は、方形透かしを2方向2段にもつ。296は、短頭壺の脚部の可能性も考えられる。297は土師器の高坏脚部である。302、303は短頭壺、304は盤である。305は、変形壺である。浜松市半田山C39号墳から出土しているものは、これに脚が付くものである。これらの出土土器は、坏身の器径からⅢ期末～Ⅳ期後半に位置づけられる。

3号墓（第34、36、81図）

玄室には、奥壁から1.4mの範囲に板石が敷かれていた。この上から大刀、刀子、玉類の多くが出土した。閉塞石は羨道部の入り口付近に積まれていた。出土遺物は、第81図307～326に図示した。307は坏身で、器径10.25cmを測る。308は、半球形坏部高坏である。309の提瓶は、把手とボタン状つまみが付き、口縁部には波状文が施されている。312、313は刀子である。312は残存長9.46cm、刃部は8.2cmを測る。茎部分には、木質が認められる。313は、残存長9.96cmで、茎の長さ4.2cmを測る。314は大刀の縁金具である。玉類には、切子玉4（316～319）、棗玉2（320、321）、ガラス小玉3（322、324、325）、滑石製小玉1（323）がある。326のガラス小玉は、墓前域からの出土である。また図示していないが、壺の小片と大刀1振が出土している。出土した須恵器の型式から、Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半に位置づけられる。

4号墓（第34、37、82図）

4号墓～7号墓、9号墓の5基は、墓前域を共有している。玄室と羨道部の境は不明瞭であるが、床面に10cmの段差があり、平面形も若干くびれる部分を境とした。奥壁から1mの位置には、奥壁と

平行に幅20cm、長さ80cmの2本の溝が掘られていた。玄室内から出土したものは、第82図327、328の鉄鎌と329、330の両頭金具である。327は、長頭鎌で鎌身部は片刃である。

また、墓前城から出土したものは、第82図331～341である。331、332は坏蓋、333、334は坏身であるが、法量的にそれぞれセットになる。坏蓋は、口径9.4～10cm、坏身は器径10.2～10.4cmを測る。335は脚付盤である。脚部を欠損している。336は、半球形坏部高坏である。図示していないが、壺の小片が出土している。337は刀子である。残存長10.7cm、刃部8.2cmを測る。茎部分には、木質が認められる。338、339は鉄鎌、340は両頭金具、341は鏡の吊金具の破片、342、343は耳環である。鉄鎌は長頭鎌で、鎌身部は片刃である。これらの出土した須恵器の型式から、IV期前半に位置づけられる。

5号墓（第34、38、82～84図）

玄室には、玄門から奥へ90cmの範囲に20～30cm大の礫が敷かれていた。玄室と羨道部の境には、8cmの段差が認められた。遺物は礫の敷かれていない玄室の西半部に集中していた。坏蓋、坏身のほとんどが重なりあって出土した。閉塞石は、羨道部の中央から玄室寄りに一段が認められた。

出土遺物は、第82～84図344～388である。344～346は口径11～11.5cmの坏蓋で、これとセットになる坏身が、器径12cm前後の351～355である。347～349は口径9.6～9.8cmの坏蓋で、セットになる坏身が、器径10.2～10.4cmの356～361である。坏身の数が多い。362～365は、口径10cm前後の碗である。これに伴う蓋は出土していない。366は、口径10.9cmの土師器坏身である。367～370は半球形坏部高坏である。371は匙、372～374は平瓶、375、376は広口壺である。377は、畿内産の土師器坏身である。口径17.6cm、器高5.9cmを測る。内面には、螺旋状暗文を挟み、2段に放射状暗文が施されている。外面は横位のミガキ調整が施されている。外面底部は、ヘラ削りを行っている。内外面ともに丹塗りが施されている。飛鳥・藤原京の編年では、飛鳥IVに位置づけられる。378、379、380は刀子である。379の刃部は、使い減りが認められる。381は倒卵形の鍔の破片、382、383は鍔と縁金具である。図示していないが、2振の大刀が出土している。384は、素環鏡板付樽である。鏡板は、橢円形で長径6.6cm、短径5.3cmで、幅3.3cm、長さ2.1cmの立闇がつく。衡は二連式で全長推定15cmを測る。棒状の引手は全長17.3cmを測る。385、386は鏡の吊金具の破片である。387は耳環、388はガラス小玉である。出土した須恵器の型式からⅢ期末葉～IV期後半に位置づけられる。

6号墓（第34、39、85～87図）

玄室と羨道部の境には、板石が敷かれ、羨道部側では土器が集中して出土した。また、玄室南東隅の1枚の板石上には、4振の大刀（第39図419、423、424、425）が出土した。これらはすべて切っ先を奥壁に向け、刃を419、423、425が西、424が東に向けていた。閉塞石の残存状況は、良好であった。

出土遺物は、第85～87図389～425である。389～392は、口径約11cmの坏蓋である。389、390、392の天井部にはヘラ記号が認められた。393～395は、これらとセットになる坏身で器径12cm前後を測る。393、395にヘラ記号が認められた。396は半球形坏部高坏、397は平瓶、398は脚付盤、399は短頭壺である。400～402は刀子である。400は、残存長10.85cm、茎長7.35cmを測る。茎部分には、木質が認められた。403は、長頭鎌で片刃の鉄鎌である。404、405は耳環、406は瑪瑙製の勾玉、407は切子玉、408、409は琥珀玉、410～418はガラス小玉である。また、これ以外に接合不可能で図示できなかった、2つの琥珀玉があった。419は、大刀である。鍔で刃身は湾曲している。切っ先は欠損していた。残存長78.6cm、刃身残存長67.6cm、刃部幅3.1cmである。茎には、目釘孔が1つ認められ、木質が確認できる。420はこれに伴う鍔で、無窓の倒卵形で縁には半円の銀象嵌が認められた。半円の象嵌は、交互に向きを変え施されている。大きさは、7.4×5.6cmである。421は419に伴う縁金具である。金銅張りであるが、金の残りは悪い。422も縁金具である。423も切っ先を欠損していた。残存長78.6cm、刃身残存長66.4cm。

刃部幅3.1cmである。茎には、目釘孔が1つある。424は残存長78.6cm、刀身残存長69cm、刃部幅2.1cmである。切っ先は少し欠損しているだけである。茎には、鍔がはまつままの状態で残存していた。また目釘孔が1つ確認された。425は残存長76.3cmである。鍔により最も痛みが激しく、刃は欠けている部分が多い。出土した須恵器の型式からⅢ期末葉に位置づけられる。

7号墓（第34、40、88～90図）

玄室は、2つの棺座と組み合わせ石棺をもつ。1つの棺座は、奥壁に添うもので長さ1.6m、幅0.9m、高さ20cmである。もう1つは、西壁に添って別の棺座に直行するよう長さ0.9cm、幅50cm、高さ12cmに造られている。そして奥壁側の棺座の上には、組み合わせ石棺が造られていた。組み合わせ石棺は、奥壁を側板に、側壁を小口に見立て、羨道側だけに板石を立て側板としている。床面にも板石を並べている。側板が立つ部分には、幅17cmの溝が掘られていた。石棺の規模は内法で、幅67cm、長さ1.6m、深さ15cmを測る。また、残る玄室内にも板石が敷かれ玄門には、板石3枚が立っている。この板石が立つ部分には、小穴が掘られていた。石棺に伴う以外の板石は、2面確認できた。こういった玄室の状況から3～4回の追葬が行なわれたと考えられる。まず初葬は、組み合わせ石棺のない棺座を利用した埋葬である。2つの棺座が同時に使用されていたかは、不明である。次に組み合わせ石棺を用い、そして石棺外にも下段の板石を並べ、埋葬したと考えられる。3回目は、石棺外の板石に再び板石を並べ埋葬を行なったのであろう。しかし上段の板石は、組み合わせ石棺寄りの幅52cmの石列と玄門寄りの部分とでは、板石の並べ方に違いが認められることから、もう1回埋葬が行なわれたとも考えられる。遺物の多くは羨道部から出土している。閉塞石は、羨道部入り口付近で確認された。根石と前面に認められた石は、拳大の小砾を使用している。石の残りは、良好である。また、5号墓と7号墓の間の墓前域には、拳大の小砾が散らばっていたことから、これらは7号墓の追葬の際にはずされた石であると考えられる。

出土遺物は、第88～90図426～459である。426は口径11.3cm、427は口径10.6cmの坏蓋である。426の天井部には、ヘラ記号が認められる。428は器径12.5cm、429は器径11.1cmの坏身である。その法量から426と428、427と429がセットになる。430は甌、431はフラスコ瓶、432は脚坏短頸壺である。この他に図示していないが提瓶1、平瓶1、大型平瓶1が出土している。これらの須恵器は、Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半に位置づけられる。

433～443、450～452は、馬具である。433～435は素環鏡板付轡である。433は鉄具造りの立聞をもつものである。鏡板は梢円形で、長径5.2cm、短径4.2cmに、幅2.2cm、長さ2.2cmの鉄具がつく。衡は2連式で全長14.9cmである。引手は、全長13.1cmで、捻じりが加えられている。一方の引手には、用途不明の別個体の金具が付着していた。434、435は方形立聞が付くものである。434は、長径6.1cm、短径4.9cmの梢円形をした鏡板に、幅4cm、長さ1.6cmの立聞が付く。衡は2連式で全長16.1cmである。引手は、全長15.1cmである。435は、長径5.4cm、短径3.7cmの梢円形をした鏡板に、幅3.2cm、長さ1cmの立聞が付く。434と比べやや小型である。衡は2連式であるが、一方の衡先環が、変形している。残存長12.9cmである。引手は、全長10.5cmを測るが、一方の引手は出土していない。436～442は、鏡に伴う吊金具の破片である。443は、用途不明品である。450、451は鏡である。450は長さ19.7cmの3連の兵庫鎖に、長さ7cm、幅4.4cmの大型の鉄具をつけて鏡軸とし、下部にU字形をした吊金具がつく。吊金具の先端は欠損している。吊金具の残存長は、8.4cmである。451は、450と対になるものである。兵庫鎖の先端部と吊金具を欠損している。452は、鞍である。4弁の花弁状の座金具に刺金をもたない鉄製の鉄具がつくものである。座金具は、銅地銀貼りである。座金具は、径6.1cm、厚さ2mmである。顕微鏡とX線撮影による観察の結果、銀の保存状態は良好であることが確認された。造りは丁寧で、

裏側の銀の始末は、折り重なる状態が認められた。銅芯の断面形は、かまぼこ形を呈している。磐田市京見塚10号墳、群馬県前橋市大日塚古墳から同類の鞍が出土している。京見塚10号墳は7世紀前半に築造された直径10mの円墳で、主体部は横穴式石室である。ほぼ同規模であるが、座金具は銅地銀貼りで、鉄製の脚の屈曲は7号墓とは逆になっている。また、京見塚10号墳の例は、7号墓に見られる鉢部周囲に配される4つの孔を持っていない。大日塚古墳は前方後円墳とされており、主体部は横穴式石室である。鞍は前輪と後輪につく3つが出土している。座金具は銅地銀貼りである。鉢部に一条の凹線を巡らしている点が、7号墓と異なる。大きさは、径7cmと5cmである。

448、449は刀子である。448は、全長11.2cm、刃部長6.5cm、刃部幅1.2cmを測る。444～447は両頭金具である。453～456は耳環、457は滑石製勾玉、458は棗玉、459は滑石製の丸玉である。また、接合不可能で図示できなかったが琥珀玉が出土している。

8号墓（第34、41、91図）

今回確認された横穴群中、玄室の規模が最もおおきく、1基単独で墓前域をもつ。奥壁から2.4mの範囲に拳大の礫が敷かれている。しかし、礫床は全面ではなく、乱れが認められる。また、東側の玄室掘り方もいびつである。羨道部入り口付近に閉塞石は認められるが、東半分を失っている。遺物は礫床の敷かれていらない部分と羨道部と玄室の境から出土している。

出土遺物は第91図460～473である。460は口径12cm、461は口径11.2cmの坏蓋である。462～464は器径12.6cm、465は器径12cmの坏身である。465の坏部には、別個体の破片が付着し、ひずんでいる。466は脚坏盤である。また図示していないがこれ以外に、口径12cmの坏蓋1、器径12.6cmの坏身1、器径12.3cmの坏身3、器径12cmの坏身2、器径11.4cmの坏身1、甕1、平瓶3、広口壺、短頸壙3が出土している。坏身の数が多い。467は、刀子の刃部の破片、468は鉄鎌の茎部分である。469は耳環、470、471は石製の丸玉、472はガラス製、473は石製の小玉である。出土した須恵器の型式からⅢ期末葉に位置づけられる。

9号墓（第34、42、91図）

玄室と羨道部の境がない筒形を呈するもので、規模も小さい。西壁はやや張り出す。墓前域には、直径7～15cm大の礫が集中して認められた。これは、閉塞石として使用されたものと考えられる。

出土遺物は第91図474～479である。474は口径11.4cm、475は口径11.2cmの坏蓋である。476は器径11.6cm、477は器径11.9cmの坏身である。478、479は短頸壙である。底部にはヘラ記号が認められる。また図示していないがこれ以外に、口径11.4cmの坏蓋1と器径12.2cmの坏身1が出土している。これらの土器は、Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半に位置づけられる。

10号墓（第34、42、91図）

東に開口する横穴である。削平を受けており、玄室の奥壁側の一部分のみが確認された。残存長は、1.1mである。床面は、拳大の礫が敷かれている。しかし、礫床は全面ではなく、やや乱れが認められる。

出土遺物は第91図480～484である。480は口径11.5cmの坏蓋である。481、483は器径12.9cm、482は器径11.7cmの坏身である。484は、口径9.6cmの壺蓋である。また図示していないがこれ以外に、平瓶1、長頸壺1が出土している。これらの土器は、Ⅲ期末葉に位置づけられる。

11号墓（第34、42、91図）

10号墓と同様に東に開口する横穴である。削平を受けており、玄室の奥壁側の一部分のみが確認された。残存長は2.1mを測る。4号墓と同様に、奥壁から1mの位置に幅10cmの溝が、奥壁に平行して2条認められる。床面には、5cm以下の小礫が敷かれている。しかし、礫床は全面ではなく、乱れが

認められる。

出土遺物は、第91図485の耳環のみである。

出土した須恵器から位置づけられる横穴の年代を、下記の表に示した。

	1号墓	2号墓	3号墓	4号墓	5号墓	6号墓	7号墓	8号墓	9号墓	10号墓	11号墓
Ⅲ期後											
Ⅲ期末											
Ⅳ期前											
Ⅳ期後											

原横穴群は、2号墓と4号墓を除く（11号墓は土器の出土なし）横穴が、Ⅲ期末（7世紀初頭）から築造されている。Ⅳ期前半に至ることなく埋葬を終えているものが、6号、8号、10号墓である。Ⅳ期前半まで追葬を行っているものが、3号、7号、9号墓である。Ⅳ期後半まで追葬を行っているものが、1、5号墓である。7世紀前半に盛行した横穴群であるといえる。

埋葬施設、出土遺物などから横穴群をみていくと、大刀が出土しているのは、3、5、6、8、9号墓である。特に6号墓は4振の大刀がまとまって出土し、その中には銀象眼を施した鍔をもつもののが含まれている。また、馬具が出土したのは5、7号墓である。なかでも7号墓の花弁状の鞍は、目をひくものである。7号墓は、群中1基のみ組み合わせ石棺を採用している。組み合わせ石棺は、6世紀後半から菊川流域に集中して分布するものである。遠江では、菊川流域以外では、太田川流域の観音堂21号横穴と原野谷川流域の長谷1号でみられるのみである。原横穴群から北西1kmに位置する長谷1号墓は、両壁を側板に見立て、小口部分にのみ板石を立てたもので、7号墓と類似するものである。7号墓は、組み合わせ石棺外にも板石を敷いている。11基中最も規模の大きい8号墓は、大刀の出土はあるものの馬具は、確認されていない。盃掘により持ち去られた可能性も考えられる。7号墓は、玄室規模からみると群中では小さいものである。埋葬施設が特異であり、他の横穴の副葬品より秀でたものをもつ7号墓の被葬者は、菊川流域と関係が深い有力者であったのであろうか。

4. 奈良・平安時代

1) 小型土坑墓

S F76 (第43・78図、図版41・41)

H-16グリッドに位置する。倉真川に望む丘陵東側の縁辺に造られている。特殊な形態であるが、状況から墓と判断した。土坑すなわち玄室は平面形が長方形で、規模は床面で長さ2.25m、幅0.78m、深さ0.6mを測る。主軸の方向は、E-25°-Wである。長さ約2.5m、幅0.35mを測る墓道がある。墓道は玄室に対し東にやや湾曲している。入り口は急斜面に面している。床面には拳大の礫が敷きつめられている。玄室内から土師器盤と皿が、墓道部分から土師器盤破片が出土している。棺が安置されたのかわからない。覆土の堆積状況の観察から、短時間で埋没したことが考えられる。地山を横から掘り進めて部屋としたのではなく、上方から掘って土坑状にしたものと思われるが、玄室に墓道が付く形は、横穴系の埋葬施設を意識したものと考えられる。横穴系埋葬施設の構造を意識しているならば、部屋として空間があることが条件とも思われる。しかし、屋根材などの痕跡は発見されず、上屋・屋根のようなものがあったのか不明である。

次に、出土遺物を見ていく。260は土師器皿である。口径14.8cm、底径20.2cm、器高2.8cmを測る。底部外面と立ち上がり内面に丹塗りが残る。261~263は土師器脚付盤である。261は口径20.2cm、底径12.8cm、器高約4cmを測る。全体的に歪みが見られる。内外面の一部に丹塗りが残る。262は口径20.0cm、底径11.3cm、器高3.5cmを測る。内外面の一部に丹塗りが残る。口縁部は歪みがある。263は推定口径18.0cm、底径10.8cm、器高4.5cmを測る。内外面とも丹塗りが残るが、脚部には丹が施されていないようである。261・262の口唇は外側へつまみ出される作りである。時期は8世紀前半と考えられる。

2) 縁釉陶器 (図版74)

遺構に伴うものではないが、南側低地部分、I-25グリッド包含層とI-26黒色土層から、縁釉陶器の小破片があわせて10点出土している。個体数は3点のようである。写真に示した破片はI-25グリッドからのものである。口縁部片と底部片である。いずれも椀と思われる。時期は平安時代と思われる。

5. 中世

南斜面中世期遺構群 (第44図)

中世期の遺構は、集石墓とその残欠、地下式壙、墓道、掘立柱建物跡などがある。これらは、丘陵の南斜面とその南側の低地部に集中する。

南斜面は、東西約61.5m、南北約35mの範囲で、丘陵面と低地部との比高差は約11mを測る。ほぼ中央に道が造られ、その両側には斜面を造成して築かれた中世墓群が展開する。中世墓群の遺存状況は悪く、石塔は検出されなかった。斜面標からは削平により撤去された集石墓の石が数多く検出され、さらに石に混じって山茶碗や古瀬戸四耳壺・瓶子のほか渥美産・常滑産の蔵骨器片が見られる。これらのことから、南斜面の集石墓群の時期は概ね12世紀末から15世紀代と考えられる。

1) 掘立柱建物跡

S H06 (第45図、図版44)

J-23・24グリッドに位置する。テラス状にされた部分にある。遺構は後世の擾乱により削られている。柱穴4が東西方向に並び、さらにS P1763の南、直角方向にS P1766が存在する。東西方向の

柱穴列が梁か桁かわからないが、約5.9mを測る。南側へ展開する掘立柱建物と考えられる。建物の方向は、南北の軸がN-12°-Wを測る。

S H07 (第45図)

F・G-25グリッドに位置する。柱穴5が東西に並び検出された。南側は検出することができなかつた。S P1795より東にピットが存在したのかは不明である。また、S P1791より西にはピットは存在しない。S P1791とS P1795間は約9.1mを測る。柱穴の大きさから、塙などではなく、南側へ展開する掘立柱建物であった可能性が高い。建物の方向は東西の軸がN-102°-Wを測る。S H06とほぼ同じ方向になるものと思われる。

S H08 (第46図、図版45・46)

調査地南側の低地部分、H-25・26グリッドに位置する。3間×5間、大きさは約5.6m×約9.6mを測る大型の建物である。建物の方向は南北の軸が、N-10°-Wである。S P2191とS P2213の底部には木片が残り、S P2217とS P2224の底部には木片と柱根が残っていた。低地の粘土層に建つ大型の建物であるS H08の柱が沈むのを防ぐために底部に入れられた木材が残ったものと考えられる。

S H06・S H07・S H08は、いずれも大型の建物であるため、私的な建物というより、公的な建物である可能性が高い。北側に存在する墓地に関する建物と考えられる。

2) 墓 跡

1号集石墓 (第47図、図版47)

G-22グリッドに位置する。斜面最上段で墓道より西側において検出した。今回の調査で検出された集石墓の中では遺存状況は比較的良好である。長辺3.2m、短辺2.1mを測るが、短辺側は削平されていた。墓は、斜面を掘り進め、さらに「コ」の字形に壁構を巡らせており、磐田市の一の谷中世墓群にみられる「コ」の字形区画墓に近似するタイプと考えられる。壁構中から複数のピットが検出されたため、上屋状の施設が存在していた可能性がある。内部には5~15cm大の礫が敷設されていた。石は削平による散逸のため、区画や配列された様子は見受けられなかった。山茶碗の底部片が出土した。

2号集石墓 (第48図、図版48)

F・G-22グリッドに位置する。1号集石墓から約1.5m西側において検出した。集石は斜面上段に造成された平坦面から、1.8m×0.6mの細長い範囲に密集した状態で検出された。石は10cm以下の大きさである。しかし、集石に伴う土坑などは検出されず、遺構としての規模や形態は定かではない。遺物は出土しなかった。

3号集石墓 (第48図)

G・H-24グリッドに位置する。斜面下段でS H07の北側において検出した。長辺3.4m、短辺0.5~0.8mを測るが、短辺側は削平されている。そのため、斜面の断面形を見ても平坦面の残存は僅かである。集石は遺構東側に片寄り、1.3m×0.8mの範囲に5~20cm大の石がまとまって検出された。多くは平坦面よりも削平された斜面に流出したような状況である。山茶碗の底部片などが集石に混じって出土した。

4号集石墓 (第49図、図版48)

G-24グリッドに位置する。斜面下段で3号集石墓に隣接する。長辺5.0m、短辺3.5mを測るが、短辺側は削平されている。集石は遺構東側に片寄り、1.9m×1.2mの楕円形をした範囲に5~20cm大の石が斜面を造成した平坦面から検出された。集石範囲の中心部には散逸による隙間が目立つ。山茶碗の底部片が集石に混じって出土した。

S X34、S F99・100（第50図、図版49）

G・H-22・23グリッドに位置する。斜面中段で墓道の脇において検出した。S X34は長辺7.4m、短辺1.2mを測るが、短辺側に削平がみられる。その外側を区画するように溝（SD92）が巡り、東端は墓道に接する。方形状に掘り廻める点が1号集石墓と似ているが、集石はすべて流失している。また、1号集石墓で検出した壁溝中のピットも見られない。S F99・100はS X34と墓道との間に位置する。切り合い関係のある数個の不定形の土坑で構成され、S X34を区画する溝に収まる。S X34からは土師器の壺・皿、山茶碗やかわらけなどの小破片が出土した。S F99から出土した土器片は中世期に属するものではなく流れ込みと思われる。S F100から遺物は出土しなかった。

S X35・36（第50図）

H・I-21・22グリッドに位置する。斜面最上段で墓道の脇において検出した。S X35は大きく削平されており規模は不明である。斜面を造成した平坦面が若干残存し、それを区画する溝を検出した。平面形はS X34と似ている。S X36は長辺5.0m、短辺2.8mを測るが、短辺側は削平されている。内部から数個のピットを検出したため、上屋状の施設が存在した可能性がある。いずれも集石は検出されなかった。山茶碗の底部片がS X35から出土した。S X36から出土した土器片は中世期に属するものではなく流れ込みと思われる。

S X37（第51図、図版49）

H-22グリッドに位置する。斜面上段でS X35・36の下において検出した。天井が完全に崩落していたが、断面形から地下式壙と判断した。入口部は階段付きタイプで、玄室は長辺2.1m、短辺1.4mの長方形を呈し、深さ1mを測る。山茶碗片が出土した。地下式壙はS X37の1基のみで、その特異性が注目される。

S X39（第52図、図版48）

L-23グリッドに位置する。斜面据で調査区東端付近において検出した。長辺2.6m、短辺1.4~1.8m、深さ10~30cmの長方形の土坑で、内部から5~20cm大の石が中央から西に片寄って検出された。集石は隙間が目立ちまばらな状態である。土師器片などが出土した。

S X40・41・42・43（第52図）

H・I-24グリッドに位置する。斜面下段においてほぼ一列に近接して検出された。S X40は長径1.3m、短径1.2m、深さ15~25cmの土坑である。S X41~43は複数の不定形な土坑からなり、切り合い関係が見られる。S X41は長径1.7m、短径1.35mと長径1.4m、短径0.9mの土坑2個から構成される。S X42は長径0.85m、短径0.5mと長径1.5m、短径1.25mと長径1.2m、短径0.85mと長径0.75m、短径0.6mの土坑4個から構成される。S X43は長径1.5m、短径0.95mと長径1.0m、短径0.7mと長径1.35m、短径0.85mの土坑3個から構成される。S X41とS X43から山茶碗の底部片などが出土したが、それ以外から遺物は出土しなかった。

S X44・45（第51図、図版49）

K・L-22グリッドに位置する。斜面中段の調査区東端付近である。S X44は長辺4.4m、短辺1.4mの方形を呈する。S X45は長辺9.6m、短辺1.0~3.0mの不定形で、東端は調査区外へ続く。最大で幅2.2mほどの平坦面がある。いずれも集石は検出されなかった。S X45から山茶碗の小片が出土したが、S X44から遺物は出土しなかった。

3) 溝状遺構

S D81（第54図）

C-20・21グリッドに位置する。丘陵南西縁辺部付近において検出した。「コ」の字状を呈した溝で

ある。形状から丘陵上で検出された方形周溝墓の1つと考えたが、溝内から山茶碗片が出土したので、中世期の遺構と判断した。上辺端は調査区外へ続き、下辺端は立ち上がる。全長約10m、幅0.6~2.1m、深さ0.3~0.5mを測る。多くの中世遺構が検出された南斜面から離れているため、墳墓群との関係は薄いと思われる。遺構の性格については不明である。

S D86 (第44図)

D~I-21~26グリッドに位置する。丘陵南側の低地部から斜面のほぼ中央を一直線に縦断し、斜面を登り切ったところで直角に曲がり、そこから西へ丘陵縁辺を横断する。両端とも調査区外へと続く。低地部から斜面を登り切ったところまでの長さ約57m、幅約2.0m、丘陵縁辺で長さ42m、幅約2.0mを測る。斜面上で2ヶ所断続する部分が見られるが、形状から道と推定される。底面より11世紀代の灰釉陶器片が出土したため、道は南斜面に展開する墳墓群に先行するものと考えられる。墳墓群が築かれた後は墓道として利用されたと思われ、逆に墳墓群は道による規制のもとで築かれていたことが伺える。

なお、S D86と接するように東西方向に台地縁辺を横断するS D87が存在する。S D87からは、嶺田式の弥生土器が出土しており、弥生時代中期の溝と考えられる。

6. 近世

1) 近世屋敷地 (第55~57図、図版50~54)

台地上の最も北、D~G-6・7グリッドに位置する。北側に標高51mの丘陵を控えている。比高差は12mである。南側は谷地形となっている。丘陵南斜面の裾を削り平場を造成している。中心的施設は掘立柱建物S H01である。東側にはS D07、西側にはS D08が北側から回り込むように掘られ、屋敷地を区画すると共に、排水の役目もあったものと考えられる。屋敷地内のその他の遺構は、円筒形の土坑、長方形の平面形の土坑が見られる。

S H01は2間×3間の建物で、大きさは約3.7m、約6.4mである。柱間は梁が約1.8m、桁が約2.1mを基準としているようだ。東側にS P629とS P68があり、S H01に付随するものと考えられる。また、西側にはS P31からS P47が南北方向に列をなすが、S H01と別の施設のような施設か、S H01の建て替えがあったことが考えられる。そして、北側にはS P560からS P564まで東西方向に列をなし、堀と考えられる。S H01の東にもピットが存在するが、これらはS H01、そしてS X02を含めて副次的な建物があったと考えられる。

S X02は長さ3.5m、幅2.5m、深さ0.8mのすり鉢状の土坑にテラス状の10~20cmの浅い掘り込みが周囲に付く。土坑の中には木杭と板材が残されており、足湯のように考えられる。また、幅20~30cm、深さ10~30cmのS D69が、北側から東側を廻り、南に存在するS F08もしくは谷と繋がっている。S D69は小砾が入れられた暗渠となっており、S X02からの排水のためのものと考えられる。S X02を方形に開むように大きさ0.25~0.5m、深さ0.2~0.6mの小穴が存在し、これに柱を立て屋根が掛けられていたことも考えられる。洗い場のような施設だったのかもしれない。

S D07西側には、径1.5~1.8m、深さ0.6~0.8m円筒形の土坑が5基検出された。隣接する土坑どうしは切り合いが見られ、S E04→S E05→S F05の順で新しくなる。S E07・08はS E07→S E08の新旧関係がある。これらの円筒形を基調とした土坑は、溜としての機能があったものと考えられる。長さ約2mの長方形の土坑は屋敷地西側、S H01を挟んで南と北に存在する。機能は不明である。

北の斜面には、小規模な炭焼窯がつくられている。天井は崩落しており、礫が入れられ廃棄された状態で検出された。大きさは、焚き口から煙道口まで1.6m、煙道部分が0.4mのあわせて2mを測る。

深さは煙道で0.65m、焼成室で0.45mである。煙道口の両側には、補強のためと考えられる、およそ30~40cmの礫が埋め込まれている。この屋敷用の炭焼窯なのだろう。

2) 道状遺構（図版55・56）

台地上には縦横に溝状遺構が検出されている。SD53とSD54は東側縁辺部に沿って存在する。SD53、SD33、SD36等が枝分かれする。概ね直線的である。また、西側縁辺に沿ってSD31が存在する。これも概ね直線的であるが、途中鉤の手に曲がる部分も見られる。これらからは、瓦片や陶磁器などが出土している。また、SD54もSD31も近世屋敷地の西側付近に接続している。そのことから、これらは近世屋敷地へ至る、また、南側に存在が考えられる畑地をつなぐ道路の遺構と考えられる。

3) 土壙墓群（図版57）

倉真川に面した、調査地東側の斜面の中段に土壙墓26基を検出した。平面長方形を基調とする。大きさは大きいもので長さ1.2m、幅1.0m、小さいもので長さ0.65m、幅0.6mを測る。深さは、削平されたものも考えられるが、一番深いもので0.84mを測る。遺構内から木片、銭貨、釘が出土している。近世屋敷とほぼ同時期の土壙墓と考えられる。

III まとめ

ここでは、調査の成果を箇条書きにしてまとめとしたい。

1. 埋没していた谷からの縄文・弥生土器の発見

台地東側の倉真川に向かって開く谷は、古墳時代以降いわゆる黒ボクによりほとんど埋没していた。その埋没土中から、縄文時代中期と弥生時代前期末葉から中期前葉の土器が多量に出土した。この台地上に当該期の集落があったことを示す資料であり、さらに、稻作の導入時期を考える好材料となる。

2. 弥生時代中期後葉の大型方形周溝墓の存在

この調査で発見された方形周溝墓は7基で、いずれも弥生時代中期後葉である。方台部の規模をみると、約5mのものが2基、約9mのものが2基、約12mのものが2基、約14~15mのものが1基であった。大型のものの存在が注目される。中期後半の方形周溝墓で大型のものは、市内では岡津地内の岡津原Ⅲ遺跡で発見されている。方形周溝墓の大型化を考える資料となる。そして、S Z06・07をはじめとして、多量の土器が出土した。弥生時代中期後葉の貴重な資料となるものだろう。

3. 古墳時代後期の集落の発見

台地南側縁辺と南側斜面から、竪穴住居跡4軒を検出した。なかには煙道を設けた竈を持つものが見られた。出土した遺物から、5世紀末から6世紀にかけての時期と考えられ、導入期の竈といえる。近年、古墳時代後期の集落は台地上や沖積地でも調査例が増えつつある。今回の発見も貴重な資料となるものと思われる。

4. 原横穴群の発見

埋没していた解析谷から横穴墓11基が発見された。5号墓からの畿内産の暗文土器、6号墓からの銀象嵌がされた鍔をもつ大刀、7号墓からの花弁状の鞍など、注目すべき副葬品が多い。

5. 緑釉陶器の存在

遺構に伴う出土ではないが、調査地南側の低地から綠釉陶器片が出土した。綠釉陶器は、市内では、奈良時代のものが、六ノ坪遺跡から、平安時代のものが、原川遺跡、梅橋北遺跡、掛川城址（現在第一小学校のある地点）から出土している。いずれも郡衙など公的な施設、加えて古代東海道筋と絡めて考えられている遺跡である。原遺跡から倉真川をはさんだ対岸地城は「中宿」という地名があり、それを古代東海道と関連付けて考える人もいる。綠釉陶器の出土イコール公的施設でもないのかもしれないが、贅沢品である綠釉陶器が存在する意義は大きいだろう。

6. 中世墳墓群と関連施設の存在

南向きの斜面に中世墳墓群が展開していたことがわかった。斜面はテラス状に加工され、集石墓等が低地から続く墓道でつながれている。低地には墓参した人々が利用したかもしれない大型の建物がある。ここは当時の人々にとって宗教的に重要な場所であったと考えられる。

7. 近世の屋敷の発見

当時であれば、掛川城下町を一望できる眺望のよい場所に18世紀後半から19世紀にかけての屋敷地が営まれていた。

原遺跡の存在した台地は、すでに造成が進み、遺跡は消滅した。しかし、調査によって遺跡から得られた、縄文時代から近世まで約5,000年間におよぶ多くの歴史的・文化的情報は残された。ここに報告できなかったものを含め、これらは、この地域の歴史の復元・先人の生活の息吹を感じるために活かされる貴重な資料となるに違いない。そして、活かして行かなくてはいけない。

報告書抄録

ふりがな	はらいせき・はらよこあなぐん・じろうまるこふんぐん							
書名	原遺跡・原横穴群・次郎丸古墳群							
副書名	掛川市上屋敷・西郷上地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	松本一男・井村広巳・村松弘規・大熊茂広							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL(0537)21-1158							
発行年月日	西暦2002年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
原遺跡	静岡県掛川市上西郷738外	22213	K-142	34度 46分 95秒	138度 00分 80秒	199506 ~ 199612	20,000m ²	土地区画 整理事業
原横穴群			K-142 -2	度 分 秒	度 分 秒		m ²	
次郎丸古墳群1号墳			K-299 -1	度 分 秒	度 分 秒		m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
原遺跡	集落跡 墓跡	縄文時代中期	不明	縄文土器、土製円盤、 石器	土師器、須恵器 土師器 綠釉陶器 山茶碗 陶器、磁器			
		弥生時代	方形周溝墓 竪穴住居跡 掘立柱建物跡	弥生土器、管玉、石器				
		古墳時代	竪穴住居跡 溝状造構	土師器、須恵器				
		奈良時代	小型土坑墓	土師器				
		平安時代	不明	綠釉陶器				
		中世	集石墓 掘立柱建物跡 掘立柱建物跡 土坑、溝状造構	山茶碗 陶器、磁器				
原横穴群	横穴墓	古墳時代後期	横穴墓	須恵器、土師器、 鉄製品(馬具、武具)、 玉類、耳環				
次郎丸古墳群1号墳	古墳	古墳時代中期	土壤	管玉				

原遺跡・原横穴群・次郎丸古墳群

掛川市上屋敷・西郷地区区画整理事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002年3月15日発行

編集機関 掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701番地の1
TEL 0537-21-1158

印 刷 有限会社 幸栄印刷
静岡県掛川市弥生町21
TEL 0537-24-4341㈹

